

「ママの恋人」

第一幕

第一場

東京、四谷の花岡洋子のマンション。部屋は8階にあり、上手に玄関。舞台は広いリビングになっている。子供部屋と洋子の寝室へ続くドアがあり、下手ダイニングキッチンへ続く入り口の脇にバスルーム（&トイレ）のドアが見える。下手に舞台外のベランダ（デッキスペース）へ続くサッシ窓があり、昼間は陽光が差し込むが、幕開きは夜9時頃。

音楽。客電アウト。緞帳アップ。

マネージャーの富田が電話をかけ、相手が出るのを待っている。責め感強いが腰の低い善良な男。彼はスマホを手に、明らかに困っている。

富田

（電話の相手に）ああ、すみません。ダイヤモンド・ホテルのバーですか？ お客さんの呼び出しをお願いしたいんですが。花岡洋子というお客さんです。ええ、そうです。女優の花岡洋子です。顔を見ればすぐに分かるはずだ。すみません、本人、携帯の電源を切っているもんで。もしお店にいたら、電話口まで呼んでほしいんですが・・・私はマネージャーの富田と申します。ああ、ちょっと待って。もしかすると酔っ払ってて、私は花岡洋子じゃないとウソをつくかもしれない。もしそう言ったら、花岡洋子に見た目そっくりの人でもいいから電話口に引っ張って来てください。緊急の用件なんで。すみません。

下手キッチンから妙子が登場。彼女はこの家のお手伝いをつとめる独身の中年女性。新聞のテレビ欄と芸能ニュースに精通するが、自分のストーリーは殆ど語らない女性。この家の家族のために夕食の準備中。

妙子

見つけた？

富田

今さがしてもらってる。ここにいなきゃもうあてがないね。どうせどこかで飲んでるんだ。こっちが生きるか死ぬかって時にさ。

妙子

ニューオータニのバーは？

富田

かけたよ。いなかった。

妙子

じゃあ六本木のスポーツクラブ。

富田

昼からいないんだよ。仕事すっぽかして9時間もヨガやってるかね？

妙子

・・・事故じゃないだろうね？
事故？

富田

車庫にクルマがなかったからねえ。極力自分で運転するなど言ってるんだよ。前しか見ないんでね、バックの時も。(電話の相手が出た) ああ、いましたか？(洋子役と年代の有名女優の名) ならいる？ いいや、彼女に用はありません。どうもありがとう。(電話を切って溜め息) 仕事すっぽかしたって？

妙子

CMのリハーサル！ クライアントの社長ほか全員が揃った中で彼女だけ来ない！ 連絡もつかない！ 仕方が無い、弁解も出来ないんで彼女の親が死んだことにした。明日この家に花環が届くよ。

富田

あら、まずいわね！

妙子

まずいよ！ いいギャラだしね！ この仕事一本こなすだけで、俺たちやみんな向こう一年は安泰に暮らせるんだ。

富田

そうなんだ！ どうなったの？

なんとか謝り倒して、明日に変更さ。もし今夜彼女が帰って来なかったら、明日は俺も死んだことにして。

りえ

上手玄関より、この家の一人娘のりえが駆け込んでくる。彼女は小学校4年生。生意気さと純粹さを持つ活発な女の子。走って帰って来たらしく、息がはずみ頬が上気している。

妙子

西麻布の美容室は？ あそこは11時までやってるわよ。

富田

番号分かる？

妙子は自分のスマホを富田に差し出す。番号を確認する富田。

りえ

(家の時計を見て) 8時58分。信じられない。18分で帰ってきた。

妙子

お帰り。

りえ

ついに20分の壁を破った。ママいる？ これで7時半まで寝ても遅刻しないって証明出来た。

妙子

遅かったわね。

りえ

学校が終わって塾へ行ってまた学校行ってリハーサルだもん。

妙子

リハーサル!?

りえ

全日本合唱コンクール。去年金賞だから、今年ダメだと責任重いよ。

妙子

リハーサル行くだけでしたわ。

りえ

ママいないの？

妙子 帰ってない。
りえ 9時からテレビ始まるのに。仕事？
妙子 彼に聞いて。

妙子はキッチンにはいる。

りえ (富田に) ママは？

富田 (電話に) もしもし・・・なんだ、定休日か。

りえ ママいないの？

富田 いないんだよ。どこへ行ったんだか。

りえ あぎれた。これから自分の出る番組始まるのに。

りえはリモコンでテレビの電源をつける。富田はソファアに座る。

富田 明日、急にスケジュールがはいったんでね。まさか帰って来ないなんてないよね？

りえ (大きな声で) 妙子おばさん、始まるわよ！

音楽と共にテレビの画面に「今ドキ☆スター！」のタイトルが出る。続いて芸能リポーターの浅井エリ子の顔が映り、しゃべり出す。妙子がキッチンから出て来て富田の横に座る。

浅井 (テレビ) こんばんは。浅井エリ子です。「今スタ」の時間です。今夜のゲストは、

女優の花岡洋子さんです。こんばんはー。

洋子 (テレビ) こんばんはー。

洋子の顔がテレビ画面にアップで映る。りえと妙子はテレビの洋子に向かって拍手をし、掛け声をかける。

(拍手) いよっ！ 名女優！

(観客に) うちのママです。ママは私が産まれる前から有名な女優だったの。

妙子 この赤い服いいわね。これいつ撮ったの？

りえ 先週の土曜日。これ着て参観日に来たもん。

妙子 学校がざわめいたわね。

浅井 (テレビ) 花岡さんは新作ドラマ「失われた女」で、弁護士の役を演じていらっし

やいます。役づくりでどんなご苦労が・・・。

妙子 髪はこれでよかったわね。やつぱりきれいよ、テレビ映りが。

りえ (観客に) この人は妙子おばさんです。もう10年以上、うちでお手伝いさんをしています。私は信じてませんが、彼女、若い時はダンサーだった

たんですって。

妙子
りえ

(テレビのリポーターを見て) あ、彼女、この服合わないわね。
(観客に) 妙子おばさんは、前は私たちと一緒に住んでいたんだけど、今は一階下に住んでいます。というのも、すっごいいびきをかくので、とても同じ家では暮らせなかったからです。

富田

ねえ、りえちゃん。ママ、どこへ行ったか心当たりない？

富田

ダイヤモンド・ホテルのバーは？

富田

いなかった。

富田

ニューオータニ？

富田

いや。

りえ

・・・はーん。じゃあ、きつとあれだ。

富田

あれって？ 心当たりあるの!?

富田

うん。きのう遅く、電話あったの。

富田

電話？

りえ

すっごい嬉しそうだったから、今日はデートだと思う。

富田

デ、デ、デート!?

りえ

(観客に) このおじさんは富田さんと言ってママのマナージャーなんです。いい人なんです、私はこの人だけはパパになってほしくないと思っています。

富田

(妙子に) 聞きたいかい？ デートだって！ もし本当だったら笑っちゃ

りえ

うよ。明日は俺の葬式だったのに！

富田

ママは多分本気だと思う。

りえ

本気!?! 結構だねえ！ 今度はどこの誰なんだろうねえ、ママの86番目の恋人は!?

富田

そんなにいなかった。

りえ

デートなんてうそだって誰か言って！

富田

私だって独身女ですから、恋をすることだってありますよ。

妙子

恋をしてるって言うてるわ。

富田

仕事すっぽかすな！

りえ

ちよつと静かにして！

富田

よく人に聞かれるんです。どうして結婚しないのって。一人娘を抱えて、

洋子

独身でいるつもりって。私だって娘だって、幸せを望んでいることにか

りえ

わりはありませんよ。いい人が見つければ恋もするし、結婚もしたいで

妙子

す。パパがいる楽しい家庭って、いいですもの。娘も、ママ一人じゃさ

りえ

びしいでしょうなんて、心配してくれるんです。(笑う)

富田

私のせいにしてる。

りえ

そう言えば、娘さんも大きくなられたでしょうねえ。

浅井

(嫌な予感) なんて私のことなんか聞くの！

洋子

(嫌な予感) なんて私のことなんか聞くの！

妙子

話題がないのよ。

りえ

やだもう！ 頼むからヘンなこと言わないで！

洋子（テレビ）
りえ。おかげさまで娘も、女になりましたわ。
（ソファアからずり落ちる）死んだわ。

洋子（テレビ）
りえ。今はまだ勉強が大変みたいで。この間のテストは40人中36番で。

洋子（テレビ）
りえ。（飛び上がって）なんで言うのよ!!

洋子（テレビ）
りえ。前より2番上がったって喜んでます。（笑う）

浅井（テレビ）
りえ。（笑顔で）そうですか。

妙子（テレビ）
りえ。バカ!! なんてそんなこと言うのよ! このババア!

妙子（テレビ）
りえ。どうしたのよ!

妙子（テレビ）
りえ。（顔を両手で覆い泣き声）もう生きていけない! 40人中36番なんて!

妙子（テレビ）
りえ。間違ってた?

妙子（テレビ）
りえ。あつてるわよ!

妙子（テレビ）
りえ。じゃあいいじゃない!

りえ。テレビで言ったのよ! 隣の席の子だつて知らなかったのに!

泣き出すりえ。妙子はそばへ寄り、必死でなぐさめる。

妙子（テレビ）
りえ。悪気はないのよ。ママ、あなたのこと自慢したいのよ!

妙子（テレビ）
りえ。40人中36番が、どうやったたら自慢になんのよ!

洋子（テレビ）
りえ。あの子はいい子に育ってくれたと思います。身体も丈夫ですし、虫歯一本ありませんし。

妙子（テレビ）
りえ。ほらほらほら、自慢してる! あなたのことほめてるわよ!

洋子（テレビ）
りえ。虫歯なくても口は悪いんですけど。（会場笑い声）

りえ。ほめてない!

妙子（テレビ）
りえ。そうかもね。

りえは憤然と子供部屋にはいり、鍵を閉める。

妙子（テレビ）
りえ。りえちゃん!

浅井（テレビ）
りえ。それではコマーシャルに続いて今週の「芸能特番」です!

テレビ番組、CM前の音楽（ジングル）が流れる。富田は立ち上がり、リモコンでテレビの電源を消す。

妙子（テレビ）
りえ。（子供部屋の前で）りえちゃん。あら、鍵かけちゃった。

富田（テレビ）
りえ。俺には助けられない。自分のことで精一杯だ。明日の仕事をだめにしたら俺はもうこの業界でやっていけない。一杯もらおうよ。

富田、下手のバーに行き、グラスにウイスキーを注ぐ。

妙子（テレビ）
りえ。大丈夫よ。きつと忘れてたの。明日はばっちり決めるわよ。

富田　ここ二年で何本仕事断つてると思う？　17本だよ。全部断つてなけりゃ、今頃都内に豪邸が建ったね。

妙子　すごいじゃない。それだけ仕事断つてもやっていけるってことでしょ。そりゃ、彼女がいい女優だからさ。いろんな賞もいただいてる。だけどなぜか授賞式は来たがらないんだ。去年の芸術祭賞で僕が彼女に代わって賞をもらったのがテレビで放送されてね。五つになる甥はまだに僕のこと女優だと思ってるんだ。

富田はウイスキーを一口飲む。りえが子供部屋から出てくる。帽子をかぶり、上着を着て、カラフルなりユックサックと大きなキャラクターのまくらを抱えている。

妙子　・・・りえちゃん。

りえ　私、家出するから。もうこんな家庭に生きてゆけない。新しい人生を歩み始めるから。

妙子　家出って、どこへ行くつもりなのよ。

りえ　もし私が心配なら、妙子おばさんの家でもいい。いびきはなんとか対処するから。

妙子　どうしちゃったのよ！　何事も起こってないじゃないの！　ママはいい女優だし、（富田を見て）明日はCMの仕事があるし、（りえを見て）

テレビで娘の成績が2番上がったって喜んでたし、いったいどんな問題があるわけ？　私たちはみんなハッピーじゃない？（交互に二人を見て）ハッピーじゃない？

富田　なんか焦げくさいな。

妙子　・・・あーっ!!

富田　妙子は大慌てでキッチンへ。間。妙子がキッチンから黒焦げになった肉料理（煙が上がっている）を手に無然とした表情で出てくる。

妙子　黒焦げになっちゃった。自慢のサーロインステーキ和風おろし玉ねぎソース添えが。これはいったい誰のせい？

りえ　ママのせい。みんなママのせい。

上手玄関のドアが開いて、この家の主人、花岡洋子が登場。華やかに着飾って上機嫌。

洋子　ただいまー。

全員、無言のまま洋子を見る。

洋子 遅くなっちゃったー。ねえ聞いて。重大ニュース。私、恋人ができちゃった！

一同、無言のまま洋子を見ている。

洋子 (三人を見て) 誰か死んだの？

妙子 いえ。誰も。

洋子 この起こりはこうなのよ。先週の土曜日、ロンドン・ミュージカルの初演パーティーですっごい素敵な人と会ったのよ。最初その人が向こうの壁でじーっとこっちを見てるのに気づいたの。(演技っぽく) あれー？ 私かな？ いやん、ほかの誰かよね？ こんなにたくさん人がいるから。あ、やっぱり私かと気づいた途端にドッキリよ。

妙子 ドッキリ？

洋子 心臓が、ドキン！ そしたら彼、つかつかと近づいて来てこう言ったの。

「私は作家の村上という者ですが、あなたの本を書きたいと思っていますのです。」こんな口説き文句が世の中にあると思わなかったわね。もう、脱帽！

洋子、「脱帽！」のセリフと一緒に帽子とかつらを取る。帽子とかつらは洋子が自分で家具へしまふ。

洋子 で、さっそく本の打ち合わせがしたいので、時間をつくってくださいませんか。ね。妙ちゃん。こんな時どうやって断ったらいいの？ あ

妙子 んたならなんて言っただ断れる？

洋子 言われてないのに断れないわね。

私は忘れてたの。さっぱり忘れてた。あんなお酒の席の言葉ですもん、真に受けたりしちゃうバカ見るわ。ところがさ！ ゆうべ電話がかかってきたの！(嬉しそうに身をくねらせて笑う。)

ひとしきり笑ったあと、三人を見て。

洋子 やっぱり誰か死んだの？

妙子 いえ。お肉が焦げただけ。

妙子はキッチンへ。りえは子供部屋へ退場。洋子と富田が残る。

洋子 なんか焦げくさい。

富田 ひとまず無事に帰って来たんでほっとしましたよ。事故でも起こしてんじゃないかと。リハーサルに来ないんだから。

洋子 ……なんのリハーサル？

富田 なのりハーサルって、コマースシャルのですよ！
洋子 コマーシャル？ なんの？

富田 だからネコのおやつだつて言ったでしょ！

洋子 ああ！・・・えっ？ あれは断ったわよね？

富田 断ってませんよ！

洋子 言ったわよね！ 私、ネコアレルギーだつて！

富田 それは聞きました。でも断ってませんから！

洋子 ネコアレルギーだつて言ったつてことは断ったのよ！ だつて絵コンテ
みたら、ずーっと胸にネコ抱えて「チューチュ、チューチュ」って、絶
対無理よ！ くしゃみ出ちゃうし。

富田 10秒間ぐらい我慢してくれば、おカネになるんです！

洋子 ネコダメなのよ。映画「キャッツ」も途中で映画館出たから。ネコ抱い
て笑顔になれる自信ない。もし顔をひつかかれたりしたら、次の仕事に
影響するでしょ！ どうすんの！

富田 クライアントは、どこよりも可愛いネコをさがしてくると約束してくれ
たんです。

洋子 ネコはネコ！ 共演NG！

富田 今日のリハを無理矢理明日に引き延ばしたんです！・・・じゃあ、リ
ハで断りましょう！ 明日来ていただいて、やっぱり無理だと。

洋子 明日？ 明日はダメよ。
富田 なんで!?

洋子 約束しちゃった。ハワイに行くの。彼と。

富田 ハワイ！

妙子がキッチンから出てくる。

洋子 ねえ。聞いて。真面目な話。私、しばらくハワイで過ごします。明日、
彼とハワイに行って、私を題材にした本の打ち合わせにはいります。浜
辺でチェアーに座って、私の人生を作家に話して聞かせるの。波瀾万丈
の人生をね。

妙子 (冷ややかに) 素敵。

洋子 彼はこの本を、人生最大のヒット作にしたいって言ってるの。私にとっ
ても、彼は人生最大のヒット作かもしれない。

富田 (冷ややかに) ブラボ！。

妙子 ちよつと待って、ちよつと待って！ 名前も知らない作家が声かけてき
て、あなたをモデルにした本を書きたいって。それがどうしてハワイま
で話が飛んじゃうんです!？ 打ち合わせならその辺の喫茶店で出来るで
しょ、「マイアミ」で！

洋子 マイアミよりハワイでしょ。

富田 冷静に考えてくださいよ。その作家がどんな人物で、どんな本を書いて

洋子 　　「るのか、知ってるんですか!?
知ってるわよ。」

富田 　　「名前は何んて言うんです？」

洋子 　　「村上……。」

富田 　　「春樹？」

洋子 　　「いや。」

富田 　　「村上龍？」

洋子 　　「いや。村上里の介。」

富田 　　「全然聞いたことありませんね。どんな本書いてるんです？」

洋子 　　「待つてよ。ちゃんと聞いてきたから。(メモをとりだして読む)「海辺

富田 　　「の後ろ姿」「山男とじいちゃんの後ろ姿」

洋子 　　「後ろ姿ばかりじゃないですか。読んだことないですよね？」

富田 　　「「罪と罰」だってみんな読んでないでしょ？」

洋子 　　「なんにも知らないで約束するなんて！ それじゃ詐欺にあつたつて文句

富田 　　「言えないじゃないですか！」

洋子 　　「私は人を見る目はあんのよ。」

富田 　　「ほんとですか？」

洋子 　　「映画「パンチライン」でデビューしたてのトム・ハンクスを見た時、あ、

富田 　　「こいつ売れるつて思ったもの。売れたでしょ！」

洋子 　　「そりゃ売れましたけど。」

富田 　　「その時以来の靈感よ。彼は売れるわ。今日一日彼と話して、本の趣旨も

洋子 　　「じっくり聞いた。そして、彼を信用したの。」

富田 　　「一日で信用した。私はあなたの信用つくるのに10年かけたんです。」

洋子 　　「それもすごいわ！」

富田 　　「人ごとかい！」

洋子 　　「どんな作家だつて俳優だつて、売れる前はみんな無名なの。そうよね？」

富田 　　「私が力を貸して、彼を一流の作家にしてあげたいの。」

洋子 　　「じゃあネコのコマーシャルやつてからそうして！」

富田 　　「(富田に向かって)ハーツクシオン！」

富田、洋子のくしゃみの迫力に思わずひるむ。

富田 　　「……お願いだから、もう一晚！ 考えてください！ いい仕事なんだから。今夜担当者に、ネコをCGに出来ないか聞いてみるから。(妙子に)君からも話してきかせてくれ。僕はこの家全体の幸せのために言ってるんだつて。ね……明日の朝、もう一回来るから。それまでに気が変わつたら、何時でもいいから連絡して。オーケー。」

妙子

妙子は富田を送りに玄関へ。

妙子

(玄関で富田にささやく) あきらめないで。明日までに別れることもあんだから。

富田、玄関から退場。妙子がドアを閉める。

妙子

洋子

妙子

洋子

妙子

(洋子に) あー、やれ、やれ、やれよ。
分かってるわよ。私だつてビックリ。
またおんなじパターン。売れない作家。無名の俳優。借金抱えたプロデューサー。どうせ好きになるなら、金持ちで成功した人にしたら？
仕方ないでしょ。ビビン！ときた人がそういう人なんだから。
彼のために尽くして尽くしてさ。それなのに男はあなたのおかげでチャンスをつかむと、「ハイ、さようなら」つて逃げて行く。あなたと別れたあとに幸せになった男を見て、ずいぶん泣いたわね。
昔のことは忘れたわよ。

妙子

洋子

妙子は立ち上がつて子供部屋の前に行き、ドアを叩く。

妙子

りえちゃん。今夜はママが心配させた罰にご飯つくりますつて。(洋子、妙子を振り返る) いいわね。喧嘩しちゃダメよ。

妙子、玄関から退場。洋子は立ち上がつて下手のバーへ行き、部屋の照明を少し落とす。ウイスキーをグラスに注ぎ、一口飲む。上手子供部屋のドアがゆつくりと開き、パジャマ姿のりえが登場。洋子と目が合う。照明を暗くしたので二人のピンが少し際立つ。

(子供部屋の前で)・・・ママ。恋人ができたの？

(バーで) ええ。そうなの。

・・・その人は、パパになる人？

なるかもしれない人。応援してちょうだいね。

いつも応援してるけど、うまくいかないのよ・・・どんな人？

作家なの。本を書く人よ。

どんなクルマ乗ってるの？

なんで？

クルマ見りゃ予測がつくもの。今日はどんなクルマ乗ってた？

・・・ママのクルマ。

見通し暗いわ。

本が売れて有名になったら、すつごいクルマ買つてくれるかもしれない。そのクルマでどっか行っちゃうかもしれない。前のパパみたいに。

りえ

洋子

りえ

洋子

りえ

洋子

りえ

洋子

りえ

洋子

りえ

洋子

りえ

洋子 若いのに悲観的なのね。
りえ 今は悲観的な。あたまにきてるし。
洋子 何にあたまきてるのさ？

りえ ママに。テレビで私の成績ばらしたでしょ。
洋子 そうだっけ？

りえ そう！ もう日本全国で知ってる！「あの子花岡洋子の娘よね、40人中
36番の」！

洋子 じゃあなんて言えばよかったの。学校トップの成績ですって？

りえ なんにも言わなきゃよかった！ 私にだってプライバシーがあるもん。
私のこと子供扱いしてるでしょ？ 子供だと思えばなんでも言えるもん
ね！ もう子供じゃないんだから！

洋子 プライバシーなんてのはね、一人前に恋愛ができるようになってから使
う言葉！ あんたにはまだ早すぎるわ。

りえ それが子供扱い！ 私が恋愛できないって決めつけてる！
洋子 だったら好きな男でもできたって言うの？
りえ できたわ。

二人見つめ合う。

洋子 あ、そう！ だったら今度はママに聞かせて！ あんたの男はどんなク
ルマに乗ってるの!? 三輪車!?

家の固定電話のベルが鳴る。洋子が歩いて行き、電話をとる。

洋子 (すました声で) はい、花岡でございます。・・・え？ はい、そうで
すが。・・・はい。(受話器を胸に置いてりえに) あんたの男だわ。

りえが電話にでる。

りえ はい。・・・うん・・・うん・・・うん。ちょっと待って。(ママに)
洋子 明日、昼間、動物園に行つていい？

りえ えっ？
洋子 いいでしょ？ 明日、休みだから。
りえ え、ええ。いいわ。

(電話の相手に) いいって。行くわ。それじゃ。

りえ、電話を切る。

りえ 分かった？ 私はママが外で仕事している間にも成長してるのよ。

りえは子供部屋の前へ行き、ドアを開けてママを覗む。

洋子

私のせい？

りえは「ボタン！」と音をたてて子供部屋のドアを閉める。同時に照明、溶暗。

暗転―音楽

第二場

ひと月後。よく晴れた平日の午前中。家具の配置が変わったのは、作家のための大きな机が下手に置かれたため。下手は作家の書斎風になっている。リビングには明るい陽光が差し込んでいる。キッチンから妙子、子供部屋から外出着のりえが同時に登場し、落ち合う。音楽終了して芝居開始。

りえ

おはよう。

妙子

おはよう。おしゃれね。

りえ

デートなんだ。ママは？

妙子

買い物行ってる。(机を見て)作家の先生のため。

りえ

村上さんは？

妙子

寝てる。大きな音たてないでね。

(観客に)ママは作家の村上さんと暮らし始めました。妙子おばさんと私は、村上さんがパパになるかどうか賭けています。私はパパになるほうに。

妙子

(観客に)私はならない方に。

りえ

ママいつ帰る？

妙子

用あるの？

りえ

うん。デート行く前にママに聞いておきたいことがあるの。でも、妙子

妙子

おばさんが代わりに答えられるって言うなら、今聞いてもいいけど。

りえ

ママに答えられるものは私にだって答えられるわよ。

妙子

もし今日のデートで彼にキスされそうになったら、どうしたらいい？

りえ

ママに聞いて。

妙子

妙子、キッチンへ退場。「ピンポン！」とドアベルの音。

りえ

私が出る！

りえは玄関に行きドアを開ける。スーツケースを持ったきれいな若い女性が立っている。彼女の名は五十嵐マリ子。地方の大学を卒業して上京した。人生をスタートさせる意欲で輝いている。

マリ子

こんにちは。

りえ

こんにちは。

マリ子

花岡洋子さんのお宅ですね。

りえ

はい。

マリ子

私、五十嵐マリ子といます。この家に、五十嵐妙子さんて方、いらっしやる？

りえ

(名字が一緒) ああ！ ひよつとして、妙子おばさんの子供？

マリ子

妙子おばさんのお兄さんの子供。

りえ

(キッチンへ呼びかける) 妙子おばさん！

妙子、キッチンから登場してマリ子に気づく。

妙子

マリちゃん！

マリ子

おばさん！ 手紙届いた？

妙子

けさ届いたところ！ こんなに早く来るなんて！

マリ子

もう待ちきれなくて！ 途中で手紙を追い越しそうになったんで名古屋駅で休憩してたくらい。

妙子

きれいになったわ！ 制服着てるイメージだったけど。

マリ子

服と化粧のせい。中身は変わつとらんけん。おばさんは全然変わらんと。

妙子

昔から老けてたから。(りえに) りえちゃん。私の姪のマリちゃん。九州から来たの。

りえ

(アメリカ風) ハイ。

マリ子

(マネして) ハイ・・・(妙子に) 東京の子はちがうわ！

妙子

(りえに) しばらく私の家に住むから。(マリ子に) 鍵開けるわ。

マリ子

お世話になります。

妙子

ちらかってるわよ。

妙子はマリ子を連れて玄関から退場。りえが一人残る。

りえ

(マリ子のマネをしてみる) 中身は変わつとらんけん。

寝室のドアが開き、ガウン姿の村上が寝ぼけまなこで登場する。い

い男だが、起き抜けで髪はくしゃくしゃ。連日の執筆で苦しみ、疲れてやつれたように見える。りえは彼を見て。

りえ (観客に) 起きたわ！ ママの恋人！ 村上さん！ (村上に) おはよう！

村上 (まぶしそうに) おはよう。何時だい？

りえ 10時半。

村上 夕方かと思った。君がいたからね。

りえ 今日から春休みなの。ママ買い物だつて。

村上 ・・・頭が冴えないな。(机の方へ歩き) コーヒーあったっけ？

りえ いるる？

村上 いや、いい。ここに冷えたのあった。

村上、自分の机の上のコップから飲み干すが。

りえ それ妙子おばさんの便秘の薬。

村上 (飲んでから変な声を出す) ウへ〜……………

りえ ・・・大丈夫？

村上 (変な声を出す) ウへ〜……………

村上、おなかを押さえて立ち止まる。【SE】おながが「ゴロゴロ」鳴る音がする。

りえ 別の薬飲む？

村上 (否定) いい…………それより、けさ、ママと話したかい？

りえ ううん。何を？

村上 僕のこと…………ゆうべ、ママと喧嘩しちゃってね。まだ怒ってるかなと思つて…………

りえ なんで喧嘩したの？

村上 本のことさ…………(苦しそう) 僕が書いてたやつだよ。

りえ それならすごい傑作つて言つてた。

村上 はあ…………そう言つてた？

りえ ええ。文学賞間違いなしつて。

村上 だから喧嘩しちゃつた。ママはそう思つてたから。

りえ 私も思つてた。え？ そうならなかつたの？

村上 ・・・そういうことさ。そうならなかつた。

りえ じゃあどうなつたの？

村上 ゴミになつちやつた。けさ捨てちゃつたから。はああ…………

【SE】おながが「ギュー、ゴロゴロ…………」と鳴る音。

りえ 捨てた!? (村上の腕をつかんで) どこへ!?
村上 ゴミ箱! ゴミ箱に捨てちゃった!・・・ハア・・・!!

村上はトイレに駆け込む。S Eアウト。

りえ 大変だ!!

りえは慌ててゴミ箱をさがす。机の横のゴミ箱はからっぽ。りえは誰もいない寝室に飛び込んで行く。りえの動きの間、玄関が騒がしくなり、洋子と妙子、マリ子の声が聞こえる。

洋子(オフ) 大きくなって。誰かと思っちゃった。

妙子とマリ子(オフ) (笑い声)

洋子(オフ) お父さんお元気? いつも博多の名産送ってくれるの。

マリ子(オフ) はい。元気です。

洋子(オフ) すぐここ分かった? 迷わなかった?

マリ子(オフ) 大丈夫です!

買い物袋を抱えた洋子と、妙子、マリ子と一緒に登場。

洋子 そう。10年間でこの辺もまったく別の街になっちゃったのよ。昔は四谷

の土手で採ったよもぎで草餅つくったのに、今じゃ草餅買いに行くのに、めかしこんでビルのエスカレーターに乗らなきゃいけない。

りえが寝室から出てきてママたちに気づく。

ママ。

ああ、りえちゃん。先生起きた?

ママ、大変よ。

ちようど帰ってきた時に(二人に)会ったのよ。(マリ子に) みんなでお昼にしましょう。

ママ、大変。

りえ (りえに) うるさいわね。(マリ子に) うちのバカ娘です。あなたが昔来た時はおむつしておしっこたらしました。今は冬になると毎年鼻たらしめます。

ママ!

なんなのよ!

りえ 驚かないでね。村上さんが!

洋子の顔色が変わる。りえを離れたところに引つ張って行き。

洋子 (声をひそめて) 逃げちゃった?
りえ 逃げないわ。原稿を捨てちゃったって。
洋子 (大声で) 捨てちゃった!?
りえ どこへ捨てたか見つからないのよ!
洋子 ええー! 大変! 妙子さん! さがしてちょうだい!
妙子 なにを?
洋子 原稿用紙! このぐらいで束になってるの!
妙子 えー?

四人は部屋のあちこちを探し回る。りえがはたと気づいて。

りえ 今日はゴミの日だ!

全員ピタリと止まる。

洋子 妙子さん! 今日ゴミ出しした!?
妙子 しました!

四人は全員わめきながら玄関から飛び出して行く。「1階のゴミ捨て場に!」「まだあるかもしれない!」「もう10時過ぎてますけど」「間に合うかしら?」「さがして!」などのセリフ重なる。

全員いなくなったあと、村上がトイレから登場。

村上 (変な声を出す) ウへ〜……。 (おなかを押さえる)

「まだすっきりしていない。つらそうに寝室へはいり、ドアを閉める。四人が玄関から登場。妙子が嘆く洋子を抱きかかえて部屋にはいる。洋子はソファへ。」

洋子 持つてっちゃったわ。大切な原稿が、私を書いた名作がゴミになって行っちゃった。もう見つからない……。 (泣く)
妙子 あきらめるのは早い。四人でゴミ処理場で待ち受けましょう。焼く前に見つければ大丈夫!
洋子 東京中の何万でゴミ袋が集まるのよ。どうやって見つけん?
りえ うちのゴミ袋、何色だっけ?
妙子 半透明。

りえ 赤く塗るときゃよかった!
妙子 ゴミ焼却場のおじさんがパツと拾って原稿読むかもしれない。そうした

ら感動して焼くのやめるかもしれない。
読むもんですか。

なんで捨てたりしたの、原稿を。

ゆうべ喧嘩したのよ。彼は自分の原稿が箸にも棒にもかからない駄作だ
って言い出したの。私はそんなことないって言ったわ。だって本当に素
晴らしい本だったから。でも彼はすっかり自信をなくしてたので、つい。
つい？

そんなに気に入らないなら捨てちゃえばって。

言ったの！

本当に捨てちゃうなんて思わなかったのよ。あんなに一生懸命書いた原
稿を・・・彼はどこ？

トイレよ。

・・・いつから？

ずっとよ。

(トイレを見る。洋子と見つめ合い) きっとまいてんのよ。

洋子は非常に心配になりトイレの前へ。ドアを叩く。返事なし。

(戻ってくる) いないわよ。

いるわよ！ さっきはいったもの。

洋子、極度に心配してもう一度ドアを叩く。返事がない。

(声が震える) せんせー(先生)・・・やっぱりいないわ。

絶対いるったら！

(悪いことを予想) やだ、おどかさないでよ。

全員に不吉な予感が漂う。洋子、妙子のところに来て。

妙ちゃん。あんた開けてみて。

え！ どうして私が！

いいから開けてみて！

(逃げる) いやよいやよいやよ！

(セリフ重ねて) 開けて！

もし開けて自殺されてたりしたら私！

(シヨック)なんてこと言うの！ そんなこと！ りえ！ 開けなさい！

なんでよ！

ママの命令！ 開けなかったらご飯なし！

ひどい！

(トイレから離れつつ) いいから開けて！

洋子
妙子
洋子
妙子
洋子
妙子
洋子
りえ
洋子
りえ
洋子
妙子

洋子
妙子
洋子

りえ
洋子
りえ
妙子

洋子
りえ

洋子
りえ
妙子

マリ子

あの一。

全員マリ子を見る。

マリ子

私、開けましょうか？

妙子

やった。それがいいわよ。

洋子

本当？ 開けてくださる？ どうもすみません。

マリ子、トイレの前へ。洋子と妙子は直接見ることが出来ない。

妙子

ここ何階だっけ？

洋子

8階。

妙子

(小さな声で) 助からないわね。飛び降りてたら。

洋子

(妙子を非難) 私気絶するわよ、ホントに。

マリ子

(ドアノック2回) 開けますよー。

マリ子、トイレのドアを開け、中を覗く。恐ろしい間。

マリ子

(洋子たちに) いないわ。(トイレとバスルームの中へ)

妙子

飛び降りたのよ。窓から。

洋子

薬をちようだい。苦しくなってきた。

妙子

まだ若いのに。なんでそんなことを。

洋子

息も吸えなくなってきた。救急車！ 誰か私を助けてちようだい！

マリ子

トイレに窓はないわ。

洋子

窓がないのに落ちようがないわね。

マリ子は続けて寝室のドアを開ける。

マリ子

(少し声をひそめて) いらしたわ！ ベッドで寝てらっしゃる。

洋子は安心し、りえを睨みつける。

りえ

トイレから出たのは見てなかったのよ！

妙子

私、ちよつと部屋で休んでくるわ。血圧上がっちゃった。

洋子

そうしてちようだい。毎度お騒がせしました。

妙子

どういたしまして。

妙子はマリ子に抱えられるように玄関から退場。洋子とりえが残る。

洋子

・・・りえ。こっち来て。

りえ
洋子

・・・怒らない？
・・・怒らないわよ。

りえは洋子のとなりに座る。

洋子

彼に会った時・・・彼、どんな感じだった？

りえ

自分もゴミになったような感じ。

洋子

気落ちしてたのね。

りえ

いい本にならないって言ってた。

洋子

うん・・・彼、スランプなのよ。

りえ

ばば抜きの？

洋子

それはトランプ。

りえ

じゃあ、もうママの本は出来ないの？

洋子

彼が自信を取り戻せば。

りえ

そうか。

洋子

だから、なんとか自信を取り戻すように、私たちで応援しなきゃ。

りえ

私、なんでも協力するわ。ママのためになることは、きっと私のためだ

もん。

洋子

ありがとう。

りえ

さあ、デートに行かなきゃ。(立ち上がる)私・・・きのうほっぺにキ

スされたの。

まあ！

洋子

順調にいけば、今日のもつと違うところにキスされるかもしれない。そ

うなったら、どうしたらいい？

洋子

それは、二人とも人生急ぎすぎかもしれないわね。恋愛って、そういう

ことだけじゃなく、二人で歩む人生を、一人より豊かなものにできるっ

てことを考えてほしい。たとえば二人で動物園に行ったら、一人で歩く

より、うんといろんなことに気づくことが出来る。そういうこと。

りえ

分かった。

りえ

寝室のドアが開いて、村上が登場。ガウンを脱ぎ、ワイシャツとズ

ボン姿。手に上着を持つ。

りえ

出かけるわ。私は私の彼と対決しなくちゃ。

りえ

りえは可愛い手提げ袋を持つと玄関から退場。洋子と村上が残る。

りえ

・・・若い女の子がドアを開けたようだ。

洋子

妙子さんの姪よ。コーヒーいかが？ 疲れた顔してる。

村上海

驚いたよ。今ズボンを履いたらベルトの穴がひとつ縮まっていた。20代の

りえ

驚いたよ。今ズボンを履いたらベルトの穴がひとつ縮まっていた。20代の

りえ

驚いたよ。今ズボンを履いたらベルトの穴がひとつ縮まっていた。20代の

りえ

驚いたよ。今ズボンを履いたらベルトの穴がひとつ縮まっていた。20代の

りえ

驚いたよ。今ズボンを履いたらベルトの穴がひとつ縮まっていた。20代の

りえ

驚いたよ。今ズボンを履いたらベルトの穴がひとつ縮まっていた。20代の

頃に逆戻りだ。

洋子 (ポットからコーヒーを注ぎながら) 若返ったわよ。私も今ドアから現れた時に(人気の若い男性グループ名)かと思っちゃった。気分転換にどこかへ出かけましょうか。若返ったあなたとデートを楽しみたいわ。だめだよ。そんな気分じゃないんだ。ひと月かかって書いた百二十枚の原稿をポツにしたんだ。今は自分と戦うので精一杯だよ。

村上 忘れて遊んでいるうちにいいアイデアが浮かぶかもしれないわ。ゴルフでいいショットを打った瞬間にひらめくかもしれない。(スウィングして) そうだ! これで打開できるって!

村上 だめなんだ、本当に……。君には白状するが、僕はこの何年も、書いてちゃポツ、書いてちゃポツを繰り返してるんだ。僕の部屋の戸棚には、途中まで書いて挫折した原稿が七つも眠ってる。書き始めることは出来ても、書き上げることが出来ない!(絶望して顔を覆う)

洋子 あら! あなただけじゃないのよ! ガウディだってサグラダ・ファミリアを未完成のままにして死んだんだから! 芸術家にはあることよ。ねえねえ。「村上里の介未完成作品集」を発表するのってどう? 作品

村上 の続きは『あなたが考えてください』ってしとくの。コレ新しくない? いいね。こういう手もあるよ。僕の作品を書き終えてくれる作家をさがすつてのは。うまい作家に頼めば、僕よりずっとよくなって完成だ。

洋子 ああ、それもいい! 前半はあなた。後半は七人の作家。誰に頼めばいい? 書いてほしい作家のリストをつくって渡してちょうだい。私が交渉してあげる。

村上は椅子に座り、頭を抱え、苦しむ。

洋子 こういうこともあるわ。どうやってもうまくいかないと思える日もあるのよ。でも、私はあなたはいい作家だと思う。なぜって自分で原稿をポツにしちゃうのは、あなた自身の作品を見るレベルが高いから。プロのあかしなのよ。だって私なんてすつごくいと思ってたんだから。

村上 君にはすまないと思ってるよ。君を題材に本を書くのは、今でも最高の選択だと思ってる。君は美しくて、ウィットがあつて、この世に二人とない魅力的な女性だ。本当に君が生きてるように書いたらこんな面白い本はなかっただろう。だが、僕にはその才能がなかった。

洋子 もう一度やり直しましょうよ。たったひと月で私を全部書くなんて無理よ、私ひと月以上生きてんだから。私、もつと協力するから。二人で共同作業でつくればさ、きつといいもの……。あれ? どっか行くの?

立ち上がり上着を着る村上。焦る洋子。

村上 少し頭を冷やしたいんだ。二、三日、どこかへ出かけてくるよ。

洋子 うそ！ 私を置いて？

村上 今は、一人になって考えたいんだ。

洋子 いやよ、そんなの！（まとわりつくように）どうして一人で行くの？

村上 私が邪魔？ 迷惑？ 迷惑邪魔？ 邪魔迷惑？

村上 いやいや、そうじゃない。僕自身が作家に向いてるかどうか、一人になって見つめ直したいだけだ。

洋子 分かっているわよ。ちよつと二、三日だけ。そして永遠にでしょ。いったん出てった男は戻らないのよ。今までみんなそうだった。出て行くなら、いつまであなたを待てばいいのかちゃんと saying 言って。一日延滞につき三百円取るから。私に飽きたのなら飽きたってはつきり言っただい。それなら考えてみるから。

村上 何を考えるんだ？

洋子 あなたを笑わせる一発芸。

村上 ……僕が君ほどユニークだったら、いい作家になれたろう。それは本

村上当にそう思うよ。

洋子 あら！ あなたはいい作家よ！ 幕開きを書かせたら最高、ただ終わりまで書かないだけ。気にしないで。大切なのは幕開きだ。恋愛ドラマなんて最後はみんな結婚して終わり。

村上 男としてこれ以上やつかいにはなれないよ。やるとしたってまた一から書き出さなきゃならないんだ。しかも完成するかどうかわからない。僕が完成するまで辛抱強く待つてるかい？ 僕には稼ぎがないんだよ！

洋子 待つてあげる。いつまでも待つわ。トルストイは「戦争と平和」を書き上げるまで何年奥さんを待たせたか教えて。私もトルストイの奥さんの記録に挑戦するから。

村上 やめた方がいい。あてにならないから。

洋子 いいのよ。あてにならなくても。傑作が出来上がらなくてもいいの。だってその間、夢が持てるもの。この作品がステキに仕上がって行く夢と一緒に持てるなんて幸せじゃない。あなたがこの家について頑張ってくれてるだけで私もりえも嬉しいし、家が明るくなるのよ。

村上 身に余る言葉だ。光栄すぎて今の僕とはとても釣り合わないよ。ひと月分の仕事は結局ゴミだったんだ。僕は何もしてないんだ。もう一度、幕開きから初めても許してくれるって言うのかい？

洋子 もちろんよ！ 前よりいい幕開きにしましょう！ ねえ。ちよつとその辺を散歩したらすぐ戻って来て。その間にお昼ご飯つくっておくから。あなたが散歩から帰ってくる。そのドアを開けたところから幕開きってのはどう？

村上 三島由紀夫には出来るかもしれない……でも僕には無理だ。

洋子 （怒鳴る）じゃあこの家で考えて！……ごめん。大きな声出しちゃった。それがいけないのね。だから出て行くって言うんだわ。分かった。あなたが書いている時には絶対音をたてません。フランス人形みたいに

おとなしくしてる。私が必要な時は背中の中のボタンを押してみて。30秒だけ何かしてあげる。

洋子、背中を向ける。村上是背中を押す。洋子、何か芸をする。

村上
・・・そんなことしてくれなくていいんだ。これは誓って言うが、僕は今でも君を愛してるんだ。

洋子
ああ、ついにきた。別れのセリフが……。 (ソファァーにくずれる)
君にはなんの問題もない！ 素晴らしい女性だ！ もし君をまつた神社があるなら拝みにいきたいぐらいだ。問題はこの僕にある！ 小説が書けない小説家！ これはねえ、ボールを打てない野球選手、笑わせられない芸人、理念のない政治家みたいなもんだ。そんな奴はねえ、いさぎよく退場すべきなんだよ。

【SE】おなが「ギュー、ゴロゴロ・・・」と鳴る音。村上、慌ててトイレへ。洋子、追いかける。

洋子
ああ！ どこへ行くの?! お願い！ 一人で行かないで！

村上
 (洋子につかまれて) いや、一人になりたいんだ！ 一人に！
洋子
 いやいやいや、私も連れてって！ 一人にしないでー!!

村上はトイレにはいり、ドアを閉める。

洋子
そんなにこの家がいやなの？ この雰囲気を書くのを邪魔してるのかしら？ もしそうならガラッと変えてもいいわ。家具全部変えて、三日で夏目漱石の家にしてあげる。それならゆつくり書けるんじゃない？ そうするから一人でどつか出かけるなんて言わないで。生きてる私までゴミ箱の中に捨てないでー! (トイレへ)

【SE】トイレの水を流す音。村上がドアを開けて出たので、入れ違いに洋子がトイレの中へ。

洋子
 (トイレの中で叩く) 開けてー! (村上、開けてやる) ああ、開いた。

洋子トイレから出る。見つめる二人。

村上
自立だ。僕には自立することが必要なんだ。

洋子
 (悲しい声で) 分かった。自立させてあげる。来週からあなたの家賃を取り立ててあげる。本当は高いけど、優しくしてくれたら月に三千元でいいことにする。(最後は涙声)

村上是玄関へ。振り返り。

村上

・・・心配しなくても、二、三日出かけてくるだけさ。君とりえちゃんになにかおみやげ買ってくるよ。どんなおみやげがいい？
書き終えた本。

洋子

村上是玄関から出て行く。洋子は一人取り残される。何も浮かばず、悄然としてソファ―に座り一人泣く。

玄関のドアが静かに開き、マリ子が一人で登場。部屋の中を見回し、洋子に気づくと静かに部屋の中にはいる。

マリ子

(洋子の背後から) 洋子さん。

洋子

(心臓が止まるほど驚く) うわっ！・・・マリちゃん。

マリ子

ちよつといいですか？

洋子

あ、ああ・・・。(涙を拭いて取り繕う)

マリ子

私、洋子さんに話しておきたいことがあるんです。私が東京に来たわけについて。妙子おばさんには就職するためって言うけど、それは第二希望の理由なの。

洋子

・・・。(なんとか聞いている)

マリ子

私、本当は、洋子さんみたいな女優になりたいんです！私、子供の頃から洋子さんに憧れていたんです。だって！素晴らしい女性で、いつも輝いていて、幸せそうで。私は今、なんにも持ってませんが、いつか洋子さんのような女性になりたいって！

洋子

(ハンカチで涙を拭きながら) こんな女でいいの？

暗転―音楽

第三場

三ヶ月後。夜9時頃。作家の机がなくなり、家具は第一場と同じ配置になっている。娘のりえが一人ソファ―に座ってテレビを見ている。部屋の照明を薄暗くしている。

りえ

(観客に) 村上さんは、帰ってきませんでした。

音楽と共にテレビ画面に「今ドキ☆スター！」のタイトルが出る。
芸能リポーターの浅井エリ子の顔が映り、しゃべり出す。

浅井 (テレビ)

こんばんは。浅井エリ子です。「今スタ」の時間です。今夜のゲストは、最近話題のベストセラー(本を持って)「別れた男は出世する」を書いて一躍売れっ子作家の仲間入りをはたした、村上里の介さんです。こんばんはー。

村上 (テレビ)

こんばんは。

村上がテレビに映る。第二場よりきれいになっていて、髪の毛もセツトされ、パリッとしたスーツを着て男前に見える。

浅井 (テレビ)
村上 (テレビ)

今この本は大変売れているようですが、どのくらい売れたんでしょう？
発売二週間で六十五万部と聞いています。

浅井 (テレビ)

もう今、品切れで入荷待ちという状態だそうですよ！

村上 (テレビ)

そうですね。なんか、びっくりしています。

浅井 (テレビ)
村上 (テレビ)

村上さんがヒットの原因とお考えなのはどんな理由でしょう？
ああ、それはもう、はつきりしています。主人公の女優の生き方ですね。

浅井 (テレビ)

この女優は次々と恋に破れ、男性に捨てられて行くんですが、それでも明るさを失わない魅力があるんです。そのあたりが共感していただける理由だと考えています。明日に希望が持てるというか。

私もさっそく読んでみましたが、すごく面白かったです！ まだ読んでいない方は、是非とも読んでほしい！「別れた男は出世する」税込み千三百円でーす！

寝室のドアが開いて洋子が登場する。起き抜けのガウン姿で、髪はボサボサ。りえは素早くテレビの電源を消す。

洋子

はあー……。 (部屋の照明をつける) ……りえ、宿題やったの？

りえ

今日はないのよ。

洋子

宿題やんなさい。

洋子はスリッパを引きずってキッチンへ退場。すぐに出て来て。

洋子

・・・妙子さんは？

りえ

いない。

妙子が玄関から登場。陽気に鼻歌を歌い、手に本を持っている。

妙子 たいまいー。
洋子 (不機嫌な声で) おかえり。どこ行つてたの？
妙子 え？(うろたえて) ちよつと本屋へ。
洋子 なんの本よ。
妙子 (本を背中に) いえ別に。
洋子 ……おもしろくないわね！

洋子、寝室にはいり、ボタンとドアを閉める。

妙子 (りえに) 買ってきたわよ！
りえ 「別れた男は出世する」？
妙子 (見せて) ママには内緒。
りえ 読みたい！
妙子 私が読んでから！

玄関のドアが開き、マネージャーの富田が登場する。

富田 やあ。ママいるかい？
妙子 こんばんは。いるけど関わない方がいいわよ。
富田 仕事をもつてきたんだ。いい話だから。
妙子 どんな仕事？
富田 クイズ番組の回答者。気楽に出来るだろ？
富田 やめようよ。
妙子 え、なんで？
富田 一度やつて小学生と対決して負けてるから。弁護士の役とか来なくなるよ。
富田 まあね。また断る!?(富田の携帯が鳴る) あれ、電話だ。はい、もしも週刊サタデー？ 取材？ 取材ですか？ ……はい。ちよつとお待ちください。検討しますから。(電話を切る) 取材の依頼。家に来たいつて言ってるんだけど。
妙子 (「別れた男は出世する」を見せて) 絶対これ。聞いてみる？
富田 うん。(本を見る。表紙、裏表紙、ページを開けて)
妙子 (寝室のドアをノックして) 洋子さん！ 取材が来たいつて言ってるんだけど。

洋子、寝室のドアを開ける。

洋子 取材は受けないわよ！
妙子 受けなきゃダメ！ 今、日本中のフラれた女が注目してんだから！

ん？

洋子 ネットでも話題だもん。悲しい女がなんとか生きて行くために、あなたが必要だった！

洋子 そうなの？

妙子 きつともっとバズるわよ。このまま行くと今年は「尊敬される100日の本人」に選ばれるわ。手伝うから準備して。

妙子、洋子を寝室に戻してドアを閉める。戸棚からメイク道具を取り出す。富田は本をテーブルに置いて週刊サタデーに電話。

富田

(電話の相手に) ああ、先ほどの取材の件ですが、OKですのでお待ちしています。何時頃いらっしゃいますか？・・・はい。週刊サタデーのカサジマさんね。私、マネージャーの富田と申します。はい。(電話を切って) これから来るそうさ。

妙子

話題になるのはけっこうなことよ。あ、新人女優のお帰りだ。

玄関からマリ子登場。重そうなショルダーバッグを下げ、見るからに元気がない。

妙子

お帰りー。オーディションどうだった？

マリ子

・・・だめだった。

妙子

もう分かったの？

マリ子

いえ。でも、もう分かった。

妙子はメイク道具、タオルなど一式そろえて洋子の寝室へはいる。りえはテーブルに置かれた「別れた男は出世する」をそっと持って子供部屋へ退場。マリ子と富田が残る。

マリ子

こんばんは。

富田

やあ。オーディション受けたの？

マリ子

映画のヒロイン募集です。

富田

ああ・・・。

マリ子

もう、何千人も集まっています。でも連ドラやCMで見たことある有名な子は、あとから何人かで来て別の部屋に通されて、すごい格差を感じました。

富田

そうかあ・・・そんなもんだよなあ。

マリ子

私みたいに実績のない子は、誰も注目してくれないんだあつて。このみつき(三ヶ月)でよおく分かりました。一本でもいい。何かに出られれば・・・。

富田

(つぶやくように) 数ヶ月前に言ってくれば、ネコのおやつのコマー

マリ子 シヤルあつたんだけど・・・。
(くいつく) コマーシヤル?

富田 洋子さんに来た話なんだけど、ネコが嫌いなんで断っちゃったんだよ。結局、あの話は猫ひろしで撮ったんだけど・・・。

マリ子 私なら絶対断らない! どんな話でもやります! 誰からも相手にされない、断られ続ける人生は、もうツラすぎて・・・。(涙)

富田 泣かなくても・・・始めたばっかりの頃は、そういうこともあるさ。でも頑張っていれば、いつか認められる日も来るから。(マリ子に白いハンカチを渡す)

マリ子 私、悔しくて。演技をするチャンスさえもらえれば(ハンカチで涙を拭きながら)命を賭けて演技して、絶対、期待を裏切らないのに!

富田 その気持ち大事。ポーンて売れちゃってドラマ来たアイドルなんか、やる気あんのかって思うことあるし。ね、僕でよかつたらなんでも相談してくれよ。あんまり力になれるかどうか分からないけど。

マリ子 ありがとうございます。お気持ちだけで、どんなに今の私が救われるか。今まで、そんな優しい言葉をかけてくれた人はいなかったから。え? そうなの?

富田 ほんとです。冷たい言葉と扱いはばかり。富田さんだけです。

マリ子 そうかあ。世間はキビシイからなあ。まあ僕も、優しさには餓えてるからねえ・・・。頑張つてよ。僕も君に小さな役の一つや二つあげられないわけじゃないし・・・。(後半声量小さくなる)。

マリ子 (くつて) え? ホント?

マリ子、ぐつと富田との距離を詰める。富田、ギクリとする。

マリ子 どんな役でもいいの。もし本当に役をくれるなら、私、一生富田さんについて行つてもいい。

富田 一生?・・・ハハ! いや、そんな期待してもらっちゃ困るな。そんなに力のあるほうじゃないから、この業界では。

マリ子 いえ、力のあるかたよ! 花岡洋子のマネージャーだもの! まあ長年やつてるから。顔だけは知られてると思うけど。

富田 私にどんな役がありそうですか?

マリ子 え? どんな? そうだなあ。(思い出す) あ、ひとつ舞台の話があつたつけ。

マリ子 どんな舞台ですか!?

富田 いやー、ヒットした映画の舞台化だけど・・・洋子さんに話が来たけどドラマの撮影とかぶつて断っちゃったんだよ。でもまだ若い役を募集してるかもしれない。明日聞いておいてあげるよ。

マリ子 すごい! そういう展開を待っていたんです! 私、どんな役でも、必死にやります! 富田さんの顔はつぶしません!

富田

そんな風に喜んでもらえたら、マネージャーは幸せだよなあ。

マリ子

だって、仕事を取ってきてくださるかたよ！

富田

ところがこの僕は、取ってきた仕事を断られてばかりなんだ。

マリ子

（顔を近づけセクシーに）私は絶対断ったりしない。私を試してみて。

・・・ああ、ごめんなさい。ハンカチ汚しちゃった。かわりに私のあげます。（自分の美しい柄のハンカチをバッグから取り出す）

富田

い、いや、いいんだよ。

マリ子

（ハンカチを手渡して）いいえ。これはあなたのものにして。

富田

そうかい？　きれいなハンカチ・・・あ、いいにおいだ。いいの？　なんだか悪いね。得しちゃったみたいだ。

寝室から取材の準備を整えた洋子と妙子が登場する。

洋子

何を得しちゃったのよ？

富田

（慌ててハンカチをしまい、立ち上がる）あ、ああ、何も。

妙子はメイク道具を片付け、使ったタオルを持ってキッチン横のランドリーへ退場。

洋子

世の中騒がしくて寝てもらえないわ。取材は何時から？

富田

もう来ると思います。

洋子

富田くん。私、今年はこれからいっぱい仕事しようと思うの。

富田

えー！　なんでですか？

洋子

今、妙子ちゃんにネット見せてもらったたら、私が「花岡洋子失恋女」で

富田

検索ワード一位！

洋子

すごいですね！

富田

今は仕事しなさいってことなのよ・・・今まで仕事断つてばかりでご

洋子

めんね。私、これから頑張るわ。

富田

本当ですか！　クイズの回答者者ですか！

洋子

ダメ。前に出た時「犬も歩けばナニに当たる」が答えられなかったから。

富田

ネコに当たるって答えちゃった。

洋子

番組的にはおいしいですけど。

富田

女優的には・・・でも、お仕事頑張りたいはホント。なんか、恋をあき

洋子

らめたら、仕事しかないんだなって思った。

富田

いいですね！　景気づけに、今夜はみんなでどこかに食べに行きましょ

うか！

洋子

そうね！　家でくさってたつてしょうがないもの！

「ピンポン」とドアベルの音。みんなは玄関に注目。りえが音に気づいて子供部屋から出てくる。妙子もキッチンから顔を覗かせる。

富田
洋子
妙子

ああ！ 取材だ。
早めに切り上げるから。10分たったら止めてね。きりのいいところで。
りえちゃん、マリちゃん、台所片付けるの手伝って。

妙子はりえとマリ子をキッチンへ呼ぶ。富田が玄関のドアを開けると、週刊サタデイの記者、笠島が立っている。洋子は笠島に視線を向けず、下手奥のソファアにすわり、優雅に足を組んだり大女優らしいしぐさでスタンバイ。

笠島
富田

あ、週刊サタデイの笠島と申します。（富田と名刺交換）
マネージャーの富田と申します。

笠島
富田
笠島

はじめまして。本日はお忙しいところ、お手間をとらせてしまいました。申し訳ございません。
どうぞ。こちらにおかけください。
は。失礼します。

笠島、洋子と対面するソファアに座り、手帳と録音機を取り出す。
笠島は美声の二枚目。きびきびとしたやり手の態度で臨む。

笠島

私、週刊サタデイの笠島と申します。今日は、インタビューにうかがいました。

洋子

花岡洋子です・・・よろしく。

二人、見つめ合ったまま止まる。その瞬間に音楽「ロミオとジュリエット」的な壮大な愛のテーマが流れ、照明がピンクになる。洋子が笠島に一目惚れしたことが観客に分かる。

洋子
富田
洋子

富田くん・・・ちよつと台所手伝ってってくれる？
え？ なんで？
いいから。しっ、しっ。（追い払う）

富田はキッチンへ退場。洋子と笠島だけになる。音楽終了し、照明も元に戻る。

洋子
笠島
洋子
笠島
洋子

（可愛い声で）お目にかかるのは、初めてでした？
初めてです。もちろん私は、よく拝見していました。
本当？
はい。ドラマや映画があると必ず。実は、昔からファンでした。
いやん！

笠島
洋子
笠島

今夜は急にすみません。本意ではないんですが、うえの命令で。いいのよ。ゆるくくりしていつてちょうだい。それではさつそく、インタビューさせていただきます。この記事は来週発売される女性誌「ジエンヌ」に掲載する特集記事で、「男に去られる女たち」というタイトルのページになっています。

洋子

タイトル、ポジティブじゃないのね。

笠島

はい。ネガティブじゃないと売れないもんで。

洋子

そうよね。世の中そうなのよ。

笠島

そこで、失恋の大家とも言うべき花岡さんに。

洋子

大家じゃないけど。

笠島

すみません。これも本意ではないんですが、うえの命令で。

洋子

大変よね。分かった。なんでも答えるわ。

笠島

まず、失恋された時の気持ちですけど、どんな気持ちでしょうか？

洋子

失恋したその時？

笠島

はい。

洋子

その時はツライわよ。身体に大きな穴が開いて、首が取れて、その首が恨みを求めて空中をさまよって飛んで行くぐらいツライわよ。

笠島

まるで平将門みたいですね。壮絶なツラさだと。

洋子

壮絶よ。失恋てのはそんなものよ。

笠島

自殺しようと思ったことはないんですか？

洋子

睡眠薬をひと瓶飲んで死のうと。

笠島

飲んだんですか？

洋子

間違えてセサミンをひと瓶。

笠島

健康になりましたね。

洋子

はい。

笠島

どうやってそこから立ち直るんでしょうか？

洋子

そこよね、問題は。失恋した時はさ、もう二度とこんな恋愛は出来ない、

笠島

もう二度と巡り会わないと思うわけよ。だから苦しいの。かけがえのないものを失ったと思うから。だけど大丈夫なのよ。また現れるんだなあ、

洋子

かけがえのない人が。

笠島

現れますか。

洋子

それが人生面白いとこ。人生素晴らしいとこなの。世界中に70億人間が

笠島

いるわけ。自分の恋人になる人は一人だけとは決められていないのよ。

洋子

一人の相手、一つの町、ひとつの国にずっと住むっていうのもステキよ。

笠島

それが出来る人は羨ましい。でもそれがダメだと分かったら、違う町、

洋子

違う国に行ってもいいと思うの。

笠島

そうですね・・・本当にそうだ。何度でもやり直せるんですよねえ。

洋子

そうよ。

笠島

やっぱり尊敬すべき人だ。強い。本当に強い人だと思う。

洋子

そうかしら？

笠島

そうかしら？

笠島 ええ。私の中では個人戦206連勝した吉田沙保里（※上演時に強いものから選択）と同じくらい強い。

洋子 そんなに強い？

笠島 私は・・・（泣き声になる）9年前の失恋から、いまだ立ち直れずにいるんです。

洋子 まあ！

笠島 社内でも、「恋を忘れた笠島」と言われていまして。今日、この取材に行けと言われたのも上司がそれを知っていて、なんとか立ち直るきっかけをつかめるかと。

洋子 そうだったの！ なぜ9年も？

笠島 彼女が・・・（立ち上がり、少しはずす）忘れられないんです！

洋子 ああー。素晴らしい人だったのね。

笠島 はい。なんとか忘れようと、四国遍路八十八箇所巡りを五十五回行いました。比叡山の修行にも参加しました。マラソンを走ったあと続けてトライアスロンを走ってみました。でも忘れられないんです！ 出来るなら、あなたの弟子になりたい！

洋子 私が忘れさせてあげる！ 過去の人を忘れさせてあげるわ！

二人、見つめ合う。

笠島 ……好きです!!

洋子はキッチン奥に呼びかける。

洋子 みんなー。悪いけど集まってちょうだい。

富田、妙子、りえ、マリ子がキッチンから登場。それぞれにエプロンをしておたまやフライパン、鍋の蓋など台所用品を持っている。

洋子は笠島の横に立ち、四人に宣言する。

私たち、明日からハワイに行きますから。

四人 ハワイ!?

四人は手にしたフライパンなどをいっせいに床に落とす。

音楽。緞帳ダウン。

第一幕終了

第二幕

第一場

音楽。客電アウト。緞帳アップ。

三ヶ月後。夜8時頃。ソファアの上でりえがひぎを抱え、頭をひぎの中に埋めて動かない。下手ダイニングキッチンからエプロンをつけた洋子登場。右手にオムレツを乗せた皿を持つ。

りえ。ご飯が出来たわよ。食べなさい。

りえは答えず。ひぎを抱えたまま動かない。

洋子
りえちゃん。ご飯よ。あなたの好きなコンビーフオムレツとマカロニサラダ。紀尾井町ベーカーリーのチーズパンがキッチンであなたを待っています。早く食べなさい。

りえは何も答えず動かない。

洋子
ほら。ちょっと見てちょうだい。今夜のオムレツは生涯最高の出来なのよ。ほんとに（！）おいしいんだから。お願いだから出来たてのアツアツを食べてちょうだい。

りえ動かず。ママはじれてくる。

洋子
十数えるうちにキッチンへ行かないとママが全部食べることにします。いいわね。ひとっつ。ふたっつ。みっつ。よっつ。いつつ。むっつ。ななっつ。（だんだんテンポがスローになるが、りえは動かない）やっつ。ここのつ・・・とーお！

静寂。洋子の顔に怒りの色。

洋子
（息づかいが荒くなる）そう……。いいわ。あなたの分もママが全部食べちゃいます。大好きなものぜんぶ食べちゃいます。何ひとつ残りませんからね！

洋子は憤然としてキッチンへはいる。数秒間の沈黙。洋子、キッチンから登場。手にフライパンとおたま。もう我慢出来ない。

洋子

(おたまでフライパンを叩き) いいかげんにしなさい! 夕ご飯をあなたの分まで全部食べさせる気? あなたの昼ご飯もママが食べたのよ。今日だけで体重がドーンと増えて、「タレント名鑑」と違う顔になったわ! どう責任とんの! そうやってね、ご飯も食べずに泣いていたって、彼は戻っちゃ来ないわよ! ……失恋がナニ!? 誰だって一度や二度は経験して大人になるの! 過ぎたことをくよくよしていたって、過去はもう変えられない。明日に向かわなくっちゃ! ね! さあ! 明日に向かってオムレツ食べなさい!

応答なし。敵も頑固だ。洋子は深呼吸ひとつ。

洋子

ねえ。あなたの気持ちはよく分かるのよ。そりゃあツライわよ。ママだってその気持ちはよおく分かってます。…ねえ。りえ。聞いて。ママね。女学校の時にもすごく恋い焦がれた人がいたの。ママの学校にテニスを教えに来てた大学生。健康的に日焼けして歯が真っ白できれいで、ママひと目で好きになっちゃった。彼に手を握られてサーブの練習した時なんか、ママ頭に血がのぼっちゃって、相手のコートにラケットを打ち込んだわ。今日こそは気持ちを伝えようと手紙を書いて持って行った時、コートのそばに止めたクルマの中で彼が女性とキスしてるのを見てしまったの。彼のクルマから出て来たのは、ママの親友の女の子だった。三日間泣き明かしたわ。それまでまぶしく輝いていた世界の全てが暗くなつたように感じた。ママもすっかり性格が暗くなっちゃって、テニス部から卓球部に移つたの。ねえ、りえ。そこで卓球を教えに来てた暗い大学生って誰だと思う? パパよ! パパだったの! 青白い肌で歯もデコボコだったけど、笑うと可愛くていい人だった! ママ、日焼けした大学生に失恋しなきゃ、青白いパパに会うことはなかったんだから! あなただつて産まれてなかったのよ! ねえ、おかしいわよねえ。ふられた時には人生おしまいだなんて思うけれど、時がたてば笑って話せるようになるものなのよ。

りえはゆつくりとひざをくずし顔を上げる。長時間泣きはらしていたような顔をしている。口をへの字に曲げ、ママには一瞥もくれないで離れたソファーに移り、ママに背を向けるように座る。

…りえ。

ひとつだけ言っておきますけどね。

ん?

私、ふられたんじゃないやありませんからね。

え?

りえ
洋子
りえ
洋子

りえ　ふられたんじゃないの！　私がふつたのよ！　なんで私があんな男にふられなきゃなんないの！　あんなくされコンニャクいも！
洋子　くされコンニャクいも？

りえ　彼から電話かかってきたらママ言ってね。私はほかのボーイフレンドとどっかへ出かけたって。ボーイフレンドはたくさんいるんだって言ってね。絶対泣いてるなんて言わないで。（声を上げて泣く）

洋子　そう。シヨックなことがあったのよ・・・私、侮辱されたの。

りえ　侮辱・・・。（心配になる）なんて侮辱されたの？　そりゃあ、あなたの母親は芸能界なんてところにいるし、父親はいないし、あなたが充分満たされていないことは分かっています。でも、人様から侮辱されるようなことはしていないつもりです。

りえ　いいの。これはママじゃなくて私の問題なんだから、私が一人で耐えていけばいいことなの。

洋子　いいえ、あなたが侮辱されたんならママにも責任があります。どう侮辱されたのか言ってごらんさい。

りえ　きのうデイズニールランドに行つたでしょう？

洋子　ママがチケット上げたからでしょう。楽しかったでしょう？

りえ　パレードを見た時、彼に聞いたのよ。あのシンデレラと私と、どっちが可愛いって。

洋子　はあ・・・。

りえ　そしたら彼は言ったの。君はどっちかと言うとダンボだ。

洋子　・・・え？

りえ　ダンボだつて言ったのよ！（顔を歪めて悔しがる）くそ野郎！

洋子　ダンボってあの子像のでしょ？　可愛いってことなんじゃないの？

りえ　シンデレラの方がよかった！　ラプンツェルでもよかった！　不思議の国のアリスでもよかった！　ダンボはないわ！（泣く）

洋子　ママはダンボでも可愛いけどな。

りえ　いいの!?　私が学校でダンボって呼ばれても！

洋子　呼ばれたら耳動かしてやればいい。

りえ　（泣く）そんなキャラじゃない！

洋子　シンデレラのキャラもキツイのよ。第一、ガラスの靴が履けないでしょ。もういい!!　ママは分かってくれない！

りえ　りえは憤然と子供部屋にはいる。

りえ　（ドアを叩き）出て来なさい！　ダンボ！

妙子が玄関から登場する。珍しくめかしこんで舞台のプログラムを持っていてる。

妙子 ただいまー。マリちゃんの舞台初日観に行ってきたわ。
お帰りー。

妙子 洋子さんのお花、ロビーに飾ってあった。一番目立つところ。

洋子 そう。マリちゃん、どうだった？

妙子 いやー、それがよかったのよ。あの子があんなにやれるとは思ってなかった。若い頃の洋子さんを思い出したくらい。

洋子 そう。よかったじゃない。

妙子 まあ、うちの家系はね、代々芸事に向いてるのよ。私がダンサーだったでしょ。母が温泉芸者で、その姉が温泉劇団の男役。

洋子 スター一家ね。

妙子 血筋なのよ。でもさ、あの子も幸せな結婚が遠のいてしまわないといいんだけど。私だって芸を取るか結婚を取るかで悩んだんだから。

洋子 聞いたことない。そうだったの？

妙子 そうなの。大学で法律を学んでる人から告白されたんだけどさ、ダンスに打ち込みたかったから冷たくしちゃったのよ。その男が今はなんと、内閣法制局長官だ。

洋子 それいつの話!?

子供部屋のドアが開いてりえが登場。第一幕一場（P6）と同じ、
家出するかっこう。

妙子 （驚く）りえちゃん……。

りえ 私、家出するわ。家族に理解されないから。

妙子 また喧嘩したの！

洋子 意見の相違よ。

りえ ママは分かってくれないの。だから妙子おばさんちに行く。妙子おばさんはりえの味方だから。

妙子 どつちの味方したらいいか分からないわね。

洋子 この子がシンデレラに近いかダンボに近いか言い争ってたのよ。
妙子 ダンボ。

りえはむくれて子供部屋にはいり、ドアを閉める。

洋子 懲りないわ。

二人、笑う。玄関のドアが開いてダークスーツ姿の富田と、美しいドレスを着たマリ子が登場。お祝いの花束などを持っている。

妙子 ああ、今夜のスターの登場だ。まあ、どうだろう！ 女優みたいね！

富田
洋子
富田

女優ですよ。どうやら無事、初日が開けました。
お疲れ様！ 評判いいようね。

はあ。なんとか。舞台稽古までは心配して冷や汗かきましたけど、本番はしつかりしてました。前田彬子プロデューサーから将来性を感じると、お褒めの言葉をいただきました。

妙子
洋子

あらー、それはすごいじゃない！

妙子
洋子

才能がない人にはそんなこと言わない人だから。本当によかったのよ。

妙子
洋子

おめでとう、マリちゃん。

マリ子

ありがとうございます。これもすべては、洋子さんと妙子おばさんのおかげです。

妙子
洋子

まあ私に似ててよかったわね。

妙子
洋子

マリちゃんの才能と努力もあるのよ。

妙子
マリ子

それもある。おめでとう！

妙子
洋子

あの・・・それと、今夜はもうひとつ大事なご報告があるんです。

妙子
マリ子

・・・なあに？

妙子
富田

私・・・。(富田に助け船)

妙子
富田

実は私たち、結婚することにしたんです。

妙子
富田

(びっくりする)結婚!?

妙子
富田

はい。私たち、愛し合ってるんです。

洋子は啞然として声も出ない。

妙子
富田

愛し合ってる!? ちょっと！ あんたたち、いくつ年が離れてんのよ！

妙子
富田

確かに見た目は釣り合わないかもしれませんが、最近は何の差婚も流行

妙子
富田

ってるんで、珍しくはないかなと。

妙子
富田

マリちゃん、いいの!? こんなおとつつあんで！

妙子
富田

おとつつあんで。

妙子
富田

はい。愛してます。

ほら。(笑う)私も夢じゃないかと思いましたが、それを聞いた時は、でもよく考えてみたら、私は真面目で一生懸命仕事してるし、それなりに貯金してるし、あちこちで浮気するようなもてるタイプでもないし、何より初婚ですから。考えてみたら、結婚する相手としたら理想的なんじゃないかと。

妙子
マリ子

じゃあ私だつて理想的だ。マリちゃん、あなたの気持ちは？

妙子
マリ子

富田さんは・・・今、トミーって呼んでるんですが。

妙子
マリ子

トミー！ バンドマンか！

トミーは、何も知らない私に何もかも教えてくれたんです。稽古中、本当に親身になってくれた。セリフや動き、カミテもシモテも分からない私に丁寧に指導してくれた。毎日出来なくて泣いてばかりの稽古場だったから、どれだけ頼りになったか。私、トミーがいなかったら、本当に

この舞台、立てなかったと思います！
トミー！

富田 洋子 それは、やっぱり彼女が才能があったからだと思います。ずっと思っていたんですが、若い頃の洋子さんそっくりですよ！ とは言え、まだ初日ですから、明日からの舞台に備えようと思います。

富田 洋子 マリちゃん。トミー。おめでどう。お幸せに。

富田 洋子 ありがとうございます。洋子さんに祝っていただけで幸せです。・・・では今夜は失礼します。千秋楽まで劇場の近くのホテルを取ってあるので、そちらで過ごします。おやすみなさい。

富田 洋子 おやすみなさい。妙ちゃん、なんか言いなさいよ。

富田 洋子 え？ あ、おめでどう！

富田 洋子 ありがとうございます。おやすみなさい。

富田とマリ子、玄関から退場。

妙子 ・・・いや、驚いたわ。

妙子 先越されたわね、私たち。

妙子 洋子 ええ。年の差婚かあ。頑張ろう。(二枚目若手俳優の名) いけるかな？

妙子 洋子 いけないわ。

妙子 おやすみなさい。

妙子も自宅へ。退場。洋子は子供部屋を叩き。

洋子 りえ。ご飯よ！

子供部屋のドアが開いてパジャマ姿 (P10と同じ) のりえが登場。さすがにおなががすいたのでキッチンへ向かう。

洋子 おながすいたでしょう。今あつためるわ。

洋子は娘の身体に手を回し、二人は仲良くキッチンへ退場。

玄関のドアが開き、泥酔した様子の笠島がリカコに抱えられて帰宅しソファアに倒れる。リカコは雑誌のグラビアモデル。赤とオレンジ色の派手な服を着たスタイルのいい女性。音に気づいて、洋子とりえがキッチンから顔を覗かせる。

笠島 (苦しそう) うー・・・。

洋子 (様子を見て) あら！

笠島 たらいま・・・いま帰りまひた。(ろれつが回らない)

洋子 ……酔っ払ってるの？（リカコに）あなたは？
リカコ 知り合いです。

洋子 お仕事の？

リカコ グラビアモデルです。この人を送ってきたの。へべれけになっちゃった

から。はい。タクシー代。（洋子にタクシーの領収書を渡す）

洋子 （受け取って）ああ。珍しいわね。こんなに酔うなんて。

リカコ なんか難しいことでも起こったんじゃない？

笠島 （リカコの言葉を受けて）うー……。

洋子 飲み過ぎの薬あったかしら？（りえに）ご飯食べてなさい。

リカコ （りえに）おっす。

りえ （気に入らない）おっす。（キッチンに消える）

洋子は薬を取りに寝室へ。ドアが閉まった途端、笠島はガバッと起き上がる。泥酔していないことが分かる。

笠島 （洋子に聞き取れない声で、しかし必死に）帰ってくれよ！ このまま！
リカコ ダメよ。決着つけるんだから。

笠島 （ウイスパーぎみで）頼むよ！ 君はこの家をゴタゴタにする気かい！
リカコ 仕方ないわね。あんたが悪いんだから。
笠島 しかしねえ！

寝室から洋子が薬を持って登場。笠島は途端に寝たふりをする。

笠島 うー……。

洋子はそのままキッチンへ。笠島起きる。

笠島 お願いだ。今日のところはこのまま。あとで連絡するから！ ねっ！

リカコ ダメよ。私、遊びじゃないんだもん。恋愛初心者だったし。

笠島 どう見たってそう見えないじゃないか！

リカコ 人は見かけと違うの。はつきりさせないと帰れないから。

笠島 今はまずい！ 子供もいるし。日を改めて！

洋子、キッチンから登場。笠島は寝たふり。

笠島 うー……。

洋子 はい。（薬の瓶を読み）「飲み過ぎ食べ過ぎ肝臓の疲れに」（笠島に薬を
飲ませる）最近忙しそうだったもの。疲れてんのね。

リカコ 体力使ったつから。（笠島、水を吹き出しそうに）
洋子 送っていただいてすみません。タクシー代を渡します。

洋子、お金を取りに寝室へ。笠島起きる。

笠島 もう限界だ。なにを望むのか言ってくれ。君の思い通りにするから。まず彼女と別れてよ。

笠島 ……分かった。しつかり話はするから。

リカコ それから、おなかの子供が産まれたらちゃんと認知してよ。

笠島 え？ えー!? 聞いてない！ なにそれ!?

リカコ 私、妊娠三ヶ月なの。

笠島 うそ!! その日に言ってくれなきゃ!

リカコ その日に分かんないでしょ、だって。

洋子、寝室から登場。笠島寝る。

洋子 はい。五千六百円。(渡す)

リカコ (受け取り)ありがとうございます。

洋子 あなたは、彼とはいっても仕事で?

リカコ ええ。グラビアの仕事でよく。

洋子 そう……水着……とかにもなるの?

リカコ ええ。こないだは撮影と一緒に熱海に。

洋子 ああ。熱海に行ったの聞いている。

リカコ 温泉ではヌードも。

洋子 ……。(リカコの身体を見る)

リカコ あなたは、彼とどういうご関係なんですか?

洋子 一緒に暮らしてるの。

リカコ 結婚はしていませんよね?

洋子 まあ、今は。

リカコ (キツチンを指さして) あの子は、彼の子供?

洋子 いいえ。

リカコ ああ。じゃ、彼が養う義務はないですね。

笠島はもはや寝てられず、起き上がる。

笠島 はあー。薬が効いた! 気分が楽になった。(リカコに) やあ、君が送ってくれたのかい!?! 申し訳なかったね、わずらわせちゃって。(立ち上がり) 玄関まで送るよ。(リカコを引っ張って行くこうとする) もうちよつとお話したいわね。

笠島 えっ? あ、すまん! 紹介がまだだった。こちら会社でみんなでお世話になつている齋藤……名前は、なんていつたっけ?

リカコ (当然知つているのとあきれながら) リカコ。

笠島　そう、リカコさん。齋藤リカコさん……。あれ？　リリコさんじゃなかった？　うちの会社をやいっばいいるからなあ、モデルさんが！
そう……。リリコさんて愛人もいるわけ？

笠島　（大きい声）えっ!?　ちよつと、待つてくれよ。愛人だなんて、そりゃないじゃないか。え？　彼女（リカコ）が愛人だと思ってる？　そんなことないよ！　ただちよつと送ってもらっただけだ。酔っぱらっちゃったから。あ、（リカコに）タクシー代、いくらだったかな？

笠島　（冷たく）もう渡したわよ。
（洋子に）僕に何か不満があるのかな？　仕事で遅いのは商売から仕方ないよね。重大な記事を取るために夜中まで張り付くこともある。芸能人やスポーツ選手を追いかけて二、三日旅行に行くこともある。全部仕事だから。

洋子　で、彼女も仕事仲間？

笠島　そう！　もうゼーンぶ仕事。売り上げに貢献してくれてるんだ。彼女のグラビアが出た時は部数がグンと伸びてね。うちの社屋の柱一本分くらい稼いでくれたそうさ。

洋子　でもそれだけの関係じゃないくらい、私には分かるのよ。

笠島　そりゃ、仕事終わりに一緒に会食することぐらいあるさ、人間だもの。まあ、人生相談を受けたこともあるし、疲れた身体をマッサージしてもらったこともある。でもそれだけの関係さ。仕事の延長だよ！

洋子　仕事の延長には見えないわね！

笠島　そうか。それなら本当のことを言おう。確かに、少し深い関係を築いたとも言える。彼女から手紙をもらったこともあるしね。デートの誘いを……。受けたこともある、それは事実だ。でもそんなのは彼女だけじゃないよ。うちの社には若い女性なんて四百人ぐらいいるんだ。ある日気づいたら机の引き出しにラブレターがはいってるなんてこともあるじゃないか！

洋子　そう。それで彼女のラブレターをもらったわけだ。

笠島　ラブレターぐらい女の子なら誰でも書くよね!?　日常茶飯事じゃないかい!?　「お疲れ様。コーヒーどうぞ。はい、ラブレター。」うちの社はそんな感じ。

洋子　そう。それがきつかけでデキちゃったの。
笠島　デキちゃった!?　デキちゃった!!　君の想像力は女性週刊誌なみだねえ！　こーんなささいな出来事を大事件にふくらますことないだろ！　ほかの男だったらそんなことになっちゃうのもあるかもしれない。世間には。でも僕はないよ！　僕は君も知ってる通り、恋も出来ない男だったんだ！　そうだよね!?

洋子　そうだった。出会った時は「恋を忘れた笠島」だったのに、たった数ヶ月で「恋に溺れたカサノヴァ」になるなんて！
笠島　うまいこと言う！

洋子
笠島

こんな愛人を家に連れて来たりして！
愛人じゃないよ！ 僕はそんな男じゃない。そりゃ、彼女との間にやましいことがこれっぽっちもなかったとは言わない。魅力的な女性に言い寄られたら悪い気がしないのが男ってものだ。酒のいきおいを借りてキスのひとつもしたかもしれない。彼女もその気になって僕に愛の言葉のひとつもささやいたかもしれない。でも愛人じゃないよ！

洋子

いいえ愛人よ！

笠島

愛人じゃないよ！

洋子

愛人よ！

笠島

愛人じゃないよ！

洋子

愛人よ！

笠島

愛人じゃないよ！ たった一回寝ただけなんだから！

間。

洋子

寝た・・・。

笠島

一回きり！ 何度もそういう関係になったんなら僕も弁解出来ない。でもたった一回！ それもぐでんぐでんに酔っぱらっててなーんにも覚えてないんだ！ 彼女のはだかなんか！

洋子

(くらくときてよろめく) ショックだわ。今の今まで愛し合っていると、思ってたのに。あなたが好きだつていう魚の料理をたくさん覚えたのに、あんな(リカコを指す)金魚を食べちゃうなんて。

笠島

アクシデントみたいなものだ。出会いがしらの事故みたいなものだ。誰だつて事故に遭遇することはある！ たとえば、ホテルのベッドでそうなっちゃったんなら何も言えない。それだつたら罪は認める。ベッドじゃない。エレベーターの中だつた。それも一階から十階へ上がるまでのさ！

早い！

まばたきするくらいの束の間の情事だつたんだ！

でも責任取らなきゃいけないくなっちゃつたの。赤ちゃんができたから。

(驚愕) 赤ちゃん・・・！

まだ産まれたわけじゃない！ まだ産まれたわけじゃない!! 今初めて

僕も聞かされたんだ。ウソかホントか分かりやしない。まったくの間違い、勘違いつてこともあるんだ！ 想像妊娠つてこともあるだろ！

ああ、もう終わりだ・・・恋が去つてゆく・・・終わりよ。

終わりじゃない！ 終わりじゃないよ！ 彼女とは今夜話をつける。き

っぱりとね。そのために連れて来たんだ。彼女だつて本気で産むなんて

考えてないさ。ただ少し僕を懲らしめただけだよ。はいそうですか

つて別れられないだろ？ 少しはもめなきゃならないよね？

もし本当に妊娠していたらどうするの？ 彼女に情が移つてしまわな

洋子

笠島

洋子

笠島

洋子

リカコ

笠島

洋子

笠島

い？（涙声）私はあなたの子供を妊娠してないのよ！
そんなことは関係ない！ まったく取るに足らない問題だよ！ 大事な
のは心なんだ！ 僕が君を愛し大事に思っていることが全てじゃないのか
い！？ そうだろ！？ 大丈夫！ 見事に解決してみせるから！ きれいな
ぱりなんの問題も残さず解決してみせる！ だから少しだけ僕に時間を
くれ。

えっ！・・・出て行くの？

洋子
笠島

出て行くって、そういう意味じゃない。彼女を説得して、丸くおさめた
らまた帰ってくるから。

洋子

うそ！ 私を置いて？

笠島

だって君も一緒になんておかしいじゃないか！ 君に迷惑はかけられな
い。僕と彼女で結論出すよ！

洋子

（泣き声）いったん出てった男は戻らないの。

笠島

僕は違うから！ 人生にトラブルはつきものさ！ 一気に解決してすぐ
戻ってくるよ！（指でも表現）二時間だ。二時間で戻ってくるから！

（リカコに）さあ、そういうわけだ。話をしようか。

リカコ

はい。

笠島

（洋子を振り返って）すぐ帰ってくるから！ 信じて待っていてくれ。
分かった。待つてるから行って来て。でもエレベーターには乗らないで。

洋子

乗るもんか。全部階段でのぼりおりする。駆け足で帰ってくるから！

笠島

笠島はリカコを引っ張って玄関へ退場。崩れ落ちて泣く洋子。キッ

チンからりえが登場してママを見つめる。

りえ

・・・ママ。ママも失恋しちゃったの？

洋子

二時間たったら聞いて。

暗転―音楽

第二場

三ヶ月後。夕方4時頃。部屋に登山用の明るい色のテントが置かれ
ており、テントの頂上には華やかな各国の国旗が立てられている。

部屋の壁の絵が「エベレストの頂上に立つ登山家」や「南極のペン
ギンの群れ」などになっている。音楽終了して芝居開始。

りえ (観客に) 笠島さんは、帰って来ませんでした。次にママの恋人になったのは、探検家の亀岡さんです。

勇ましいマーチ風の音楽と共に、防寒服姿の亀岡がテントの中から登場する。音楽終了。

亀岡 ヤバ！ ヘテオリ！ ヌガ・セーデ！ ベッタベッタ！ グンタラ・ヒ

ーベ！ ジャジャ！

りえ ジャジャ！ なんの言葉？

亀岡 エスキモーのある種族の言葉だ。「そっちは危険だから、こっちをずーっと回って、氷の割れ目に気をつけて、恐る恐る来なさい。分かったな。」という意味だ。

へえー。

りえ 寒い地方はだいたい言葉が短く出来てるんだ。早くしゃべないと舌が凍っちゃうんでね。「チマ！」これは、「あなたのことが昔から好きな

んで、今度一度家に寄ってもいいか？」っていう意味だ。「チマ！」短いだろ？

短い！

りえ 亀岡 これが暑い地方に行くと言葉は長くゆったりしてくる。「オンデ・ジュンタルケード・ジャマアンタベ・ホワー・シャツチャン・デレデレ・ジャーダイボワ」パプア・ニューギニアのグアモンガという部族の言葉だ。長い。なんて意味？

「早くして。」

りえ すごい！ 亀岡さんて世界中の言葉知ってるのね。

亀岡 探検家だから知ってるのは秘境ばかりだけどね。パリやニューヨークは一度も行ったことないんだ。

探検家も、お金持ちになれる？

なんで？

もしママと結婚するなら、お金持ちだと思いいなと思って。

りえ そうだな。(夢見るような瞳) 有名になれば、お金持ちになれるよ。本を書いたりテレビに出演したり、スポンサーからお金も集まる。ただしねえ・・・探検家の仕事も今はだんだんきびしくなってるねえ。「太平洋ひとりぼっち」くらい女の子でもやっちゃったからね。よっぽど誰もやってないスゴイことやらないと、ニュースにもなりやしないんだ。

アメリカまで、海を泳いで渡れば？

・・・無理だ。

ロケットの羽根につかまって世界一周するとか。

・・・死んでしまう。

りえ ニュースにはなるけどね。

亀岡 大丈夫。今度の探検はすごいニュースになるよ。ママの力で、テレビ局が同行取材することが決まったんだ。こんなビッグな探検は僕も初めてさ！

りえ 有名になるね、カメさん！ どんな探検！？

亀岡 ノアの方舟（はこぶね）をさがしに行くんだ。
りえ なに？

亀岡 旧約聖書のノアの方舟。今から四千八百年前、世界に洪水が起こって、ノアの一家と動物たちを乗せた方舟だけが助かった。言い伝えによると、方舟は標高五千二百六十八メートルのアララト山（ざん）山頂に辿り着いたと言われている。そのアララト山に方舟をさがしに行くんだ。
りえ すげー。

亀岡 これは受けたよ！ 取材の申し込みが殺到したからね！（一枚の写真のコピーをりえに見せて）これを見て。アメリカの研究グループが、アララト山で雪の中に横たわる方舟の残骸を空から撮影した写真が「ムー」に載ってる。先を越されてはいけない。必ず方舟を発見して帰ってくるよ。もし発見したら世界的な大ニュースになる！

りえ もし失敗したら？

亀岡 大笑いだ。・・・絶対成功してみせるさ！ 世界の亀岡になるよ！ 今夜の飛行機で出発だ。ママと君にはホントに世話になった。帰ってくるまで、待っていておくれね！
りえ もちろん！

亀岡とりえ、ひしと抱き合う。玄関から洋子と富田が登場。

洋子 カメちゃん！ テレビ局が発発するところから撮りたいんですって。カメラ入れてもいい？

りえ スターだ！

亀岡 いいよ！

洋子 （玄関の富田に）入れてちょうだい。

富田はテレビスタッフに伝えるため退場。

亀岡 ついに亀岡鶴夫が川口浩を超える時が来た。緊張してきたな！
洋子 体調大丈夫？

亀岡 先週から風邪気味なんだ。ちよつと調子が。

洋子 風邪薬飲んどく？

亀岡 そうしよう。・・・エイ！（力を込め気合いを入れる）・・・おお！

亀岡、めまいがして崩れ落ちる。

洋子 大丈夫!?

亀岡を助け起こす洋子とりえ。

亀岡 ちよつとめまいがした。このところ緊張してご飯が食べられなかったから。もともと胃腸にくるタイプだから。
じゃ、胃腸薬も飲んどく?

洋子 そうする。万全の体調で臨まないと。・・・フンヤ! フンヤ! フンヤ!
亀岡 ヤ! フンヤ!

洋子は薬を取りに行く。亀岡は活力が出る運動を始める。

りえ なにしてんの?

亀岡 こうすると身体に活力がたまってやる気が出てくるんだ。チベットのシエルパに習ったんだよ。フンヤ! フンヤ! フンヤ! フンヤ! (りえに) やってみるか? フンヤ! フンヤ! フンヤ! フンヤ!
りえ フンヤ! フンヤ! フンヤ! フンヤ!
亀岡 とりえ フンヤ! フンヤ! フンヤ! フンヤ! フンヤ!

洋子が薬と水を持って登場。

洋子 あなたが心配だわ。本当に。身体にだけは気をつけてね。

亀岡 ありがとう。(薬を飲んで) うん。洋子さん。僕が15年の探検家生活で、今まで死なずに生きて来られた秘訣を教えてあげようか。

教えて!

洋子 それはね。僕が人一倍臆病だからだよ。決して危ないことはしない!

亀岡 これが探検家が続けて行くコツさ。ちよつとこわいなと思つたらすぐ引き返す! これが出来ない奴がみんな死んで行くんだ。自慢じゃないけど僕は寒さに弱い。海もこわい。ヘビやムカデは見るのもいや。おまけに高所恐怖症で閉所恐怖症ときてる。死なない探検家の素質をすべてそなえていると言つても過言ではない。安心したろ?

ちよつと安心した。

洋子 君とりえちゃんを泣かせたりしないさ。君にはこの計画を全面的に支援してもらつた。感謝しているよ。(洋子の手を握る)

亀岡 いいのよ。愛する人のためだもの。無一文になつたつていいの。

洋子 (洋子の肩を抱き) 成功して帰って来たら本や講演で大儲けする。すぐに返済してみせるさ。

亀岡 信じてる。きつとうまく行くわよ。(亀岡と抱き合う)

洋子 (離れて) そうだ。きのう、君のために買って来たんだけど。あまり高いもんじゃないんだけど。

亀岡は防寒服のポケットから指輪のケースを取り出す。

亀岡

婚約指輪だ。成功して帰って来たら結婚しよう。

亀岡は洋子の指に婚約指輪をはめる。りえもそれを見て。

りえ

・・・やった!!

洋子

あああ！ 神様！ やつと、やつとそう言ってくれる男が現れた！ やつと、指輪を贈ってくれた！（亀岡に抱きついて）ありがとう！ 今まで何人もこの部屋から出て行った。だけど指輪を置いて出て行く人は初めてだ！ 今度は安心して待つていられる！ あなたが帰って来るのを信じて待つていられる！ 式はどこで挙げましょう？ ハワイで子連れ結婚式でも挙げましょうか？

りえ

（喜ぶ）わーい！ 妙子おばさんに知らせてくる！

りえ、走って玄関から退場。洋子と亀岡が残る。

亀岡

ああ、それから・・・もうひとつ渡すものがあるんだ。

亀岡は防寒服のポケットから封筒を取り出して洋子に渡す。

洋子

なあに？

亀岡

遺書だよ。

洋子

遺書！

亀岡

僕は探検に行く時はいつも遺書を書いて行くんだ。どんなに気をつけていても、やはり死ぬ時は死ぬからねえ。万が一の時のために、君に渡ししておくよ。

洋子

シヨック。婚約指輪と遺書を同時にもらうなんて。ウエディングドレス

亀岡

と喪服を一緒に着たような気分。

洋子

読んでみてくれ。

亀岡

いやよ！

洋子

遺書には、僕が死んだら全ての財産を君にゆずると書いてある。

亀岡

（ちよつと期待）財産？

洋子

そう。君に言ってなかった素晴らしい財産を、僕はいくつか持つてるんだ。一つ目はチベットの山小屋。

亀岡

チベット・・・。

洋子

そう。カイルス山（ぎん）という誰も登ったことのない山の麓に、僧侶

亀岡

から買い取った一件の山小屋がある。夏は涼しいし、なにしろ軽井沢と

ちがってごった返してないのがいいんだ。日本人は僕しか行ったことが

ないから。あの山小屋を、君にあげるよ。

洋子 (がっかり) 夏にどのホテルにしようか悩まなくてすむわ。

亀岡 それからアンデスの先住民にもらった戦いの服がある。コンドルの羽根飾りがついた世界に一つしかない美しい服だ。それもあげるよ。

洋子 (がっかり) ありがとう、今度のパーティに着て行くわ。ねえ。本当に死ぬこともある？ どのくらい危険な探検なの？

亀岡 それは・・・行ってみないことには。

洋子 絶対安全な探検ってないの？ 高尾山に登るとか？

亀岡 それ探検って呼べないんじゃない。

洋子 だってもしあなたが死んだりしたら・・・ねえ。やめましょう。探検は中止にしましょう！

亀岡 えっ!?

洋子 そうよ！ そうすりやすぐ結婚出来るわ！

亀岡 そんなわけにはいかないだろう。テレビ局が来てるんだよ。出発の様子を撮りに来てるんだ！

洋子 探検やめて急遽婚約会見に変更しましょう。それはそれで話題になるから。5分でタキシードに着替えて、テレビの前で私たちは結婚しますって言うってハワイに逃げましょう。

亀岡 えーっ!?! 借金はどうすんの!?! 海の向こうには前払いで雇った35人のガイドと7匹のロバが僕の来るのを待ってるんだ！

洋子 いいのよ、お金なんて！ あなたが生きていればいいの！ それで私も幸せなのよ！

亀岡 ダメだよ！ 世間から信用されなくなる！ 探検に成功すりゃ、僕たちの結婚を日本中が祝ってくれる。今逃げたら、めっちゃ炎上するよ！

洋子 あなたを失うのがこわいの！（涙声）・・・きつと帰って来ない・・・そんな気がするの。今までみんなそうだったから。私の大事な婚約者が遠い異国の山の中で万年雪にうまってしまっうなんて、考えただけで気が変になる。どうか出て行かないで、テントに戻ってちょうだい、私と一緒に・・・！

間。亀岡と洋子、一緒にテントにはいりかけるが、亀岡は途中でUターン。やっぱり出て行く覚悟。

亀岡 やっぱりダメ！・・・行かなくちゃ！

洋子 (決め台詞風) どうして男は出て行くんだ！ 家庭よりいいところなんてないのに！ どうして零下30度の山を目指すの!?! (泣く)

亀岡 (ひきしまった顔で) 男とはそういうもんだ。馬鹿だと思っても、自分の探検に出かけるんだ。

玄関のドアが開いて、マネージャーの富田が登場。

富田
亀岡

テレビの準備が出来たようです。いいですか？
始めてくれ！

芸能リポーターの浅井エリ子、カメラマン、照明などのテレビスタッフ
が部屋にはいつてくる。りえと妙子も登場してテレビ中継を見
守る。仰々しい探検番組の音楽スタート。

浅井

（カメラに向かって）こんばんは。浅井エリ子です。女優の花岡洋子さ
んの自宅から生中継です。いよいよ探検家の亀岡鶴夫さんが、いまだか
つて誰もなし遂げたことのない大冒険に出発するところです！ ノアの
方舟は果たして実在するのでしょうか？ 番組では特別取材班を組みま
して、歴史的な探検のすべてを追跡いたします！ 亀岡さん、いよいよ
ですが、どのようなお気持ちでしょうか？

亀岡は大きなバッグを担ぎ、緊張してマイクの前に立つ。

亀岡

はい。始まるな、という心境です。

浅井

方舟なんて、あるんでしょうかね？

亀岡

えっ!? いやいやいや、聖書に書いてありますから。

浅井

見つけれらると？

亀岡

見つけます、見つけます。

浅井

自信に溢れたお言葉です。お隣にいらつしやるのは、探検のスポンサー
でもいらつしやいます、女優の花岡洋子さんです、こんばんは。

洋子

（テレビカメラに向かって嫣然と）こんばんは。

浅井

出発する恋人におつしやりたいことは？

洋子

・・・やっぱり行くのかなあと。

亀岡

いやいやいや、行くでしょ、行きますよ。

浅井

感動的な別れのシーンとなつております。鶴岡さん。

亀岡

亀岡です。

浅井

何かお言葉を。

亀岡

アイル・ビー・バック。

浅井

さあ、出発の時間がやってきました！ 二人はしっかりと抱き合っ
ております！（洋子は引き留めたい）今離れました！ またつかみ、今
離れました！ 一步一步、外に向かつて、部屋の外へと、歩みを進めて、
向かおうとしております！ ああ、出発しました！ いったんスタジオ
にお返しして、次は空港からお伝えいたしまーす！

テレビ局スタッフと富田は退場。探検番組の音楽終了。部屋には洋
子とりえと妙子が残る。洋子はソファークズれて泣く。妙子もそ

ばに座る。静かな音楽スタート。

りえ

(ママに近づき) ママ・・・泣かないで。

洋子

(涙)・・・なんでかしら。今度はうまくいくと思うと、みんななくなっちゃうね。

りえ

仕方ない、探検家だもの。でも彼は大丈夫。戻ってくるよ。

洋子

りえも信じてくれる？

りえ

うん。ママそう思わない？

洋子

自信がないのよ。戻って来た前例がないから。

りえ

戻ってくるよ。婚約指輪くれたんだもの。(妙子に) ねえ！

妙子

うん。

洋子

そうね。(指輪をはめた手を見る)

りえ

きれい。ママのこと愛してるのよ。

洋子

そうかな？

りえ

今までの人だってママを愛してた。でもみんな事情があったのよ。

洋子

あなたを頼りにしなくなっちゃった。大人になったのね。

りえ

私だってママが頼りだから。何があっても、ママのそばにいるよ。だから、ママもりえのそばにいてね。

洋子

うん。ありがとう。

りえ

カメさんの番組の続き見る？

洋子

ううん。ママ見たくないから、妙ちゃんの家で見てください。

りえ

ううん。ママ見たくないから、妙ちゃんの家で見てください。

妙子は立ちながらりえに手を差し伸べる。りえと妙子、玄関から退場。婚約指輪を見つめ、涙し、指輪にキスする洋子。音楽静かに終了。玄関のドアが開いて富田とマリ子が登場。

富田

今出発して、テレビ局と一緒に空港へ向かいました。

洋子

お疲れ様。ああ、マリちゃん。

富田

このあとドラマのオーディションに連れてくんで

洋子

いつもお騒がせしております。(マリ子、お辞儀)

富田

やれやれ・・・心配ですよ。あんな人に熱あけて

洋子

あら？ 彼は世界的な探検家になる人よ。

富田

世間は疑ってますけどねえ。莫大なお金を使ったと聞いてますけど。

洋子

アメリカだって月へ行くのにお金使ったでしょ。探検はスタートしたんだから、きつと成果があるわよ。

富田

なんの成果もなければ、破産して終わりじゃないですか。

洋子

そうはならないわよ。私には仕事があるもの。あなたがいてくれるもの。

富田

・・・いてくれるわよね、(色っぽく) トミー。

洋子

そりゃ、もちろん・・・マネージャーですから。

富田

そりゃ、もちろん・・・マネージャーですから。

洋子

(富田を見つめて)・・・今、気づいたんだけど。

富田

は？

洋子

男はずいぶん去って行ったけど、あなただけは去らなかつたわね。

富田

(赤くなる) 仕事上の付き合いですから。

洋子

そうかあ・・・考えてみるとあなただけよ。私にずーっと尽くしてくれてたのは。よく私を捨てないでいてくれたわね。

洋子、富田の近くへ、お熱い雰囲気になる。

富田

何を言ってるんですか。あなたあつての私ですよ。私はいつでも花岡洋子のことを考えて生きているんですから。

洋子

そうなのよね。ありがとう！(抱きつく)

富田

うわっ！ 初めて抱きつかれた！

玄関に立っていたマリ子、泣き出す。洋子と富田はそれを見て。

洋子

・・・マリちゃん。

富田

どうしたの？

マリ子

(泣きながら) ごめんなさい・・・でも私、この人がほんとは洋子さんを愛していること知ってるから・・・やっぱりと思って・・・。

富田

え？ そんなこと・・・。

マリ子

(泣きながら) 新婚旅行のあいだじゅう聞かされるのは洋子さんのことばかり・・・寝ても醒めても洋子さんの思い出、洋子さんのお芝居、好きなもの・・・ああ、この人が本当に好きなのは洋子さんなんだって、思つて・・・。(泣く)

うろたえる富田と洋子。

富田

ちよ、ちよつと、ちよつと。誤解だと思うよ。てか、もしそんなこと僕がしてたんなら、あやまる。もう彼女の話はしないよ。

マリ子

・・・ごめんなさい(顔を覆つて泣く)。

富田

まさか、僕と洋子さんのあいだに、何かあつたなんて思ってるんじゃない？ それはないから！ 僕はもう長年彼女と仕事してるけど、キスひとつしたことないんだから！(洋子に) ないですよね？

洋子

ないない！

富田

彼女はこの10年、いろんな人と恋をしてきた。僕はずーつとそれを見て来たけど、一度も参加したことはないんだ。もし僕が参加したら、ここまで続けられなかつたと思うよ。(洋子に) ねえ？

洋子

そうよマリちゃん。私、この人が男性だつて思つたことなかつたの。えっ？(ちよつとがっかり)

富田

恋人じゃなくてマネージャーなの。分かる？ 大事な仕事のコンビ。例

富田 富田 マリ子
えて言えば（有名なお笑いコンビ）みたいなものね。お互い、相手のことを深く知ってるけど。

でも（お笑いコンビそれぞれの名前）は恋人じゃないよね。

マリ子 ……すみません。ちょっと妬いただけなんです。私の夫は私のそばにいる時も、心は洋子さんのそばにいる……きつと私は、一番じゃないんだって思ってたから。

富田 すまん……そう思わせたなら、僕が悪い……。

洋子 一番はマリちゃんよ。だって、この人マリちゃんの夫なんだから。妻が一番に決まってる。

富田 はい、そうです。

洋子 この際はつきり言つとこう。今後のために、誤解のないように、あなたの気持ちをマリちゃんに伝えてあげて。

富田 はい。分かりました……。

富田、自分の気持ちを整理して話し出す。

富田 マリ子。僕は、君の夫だ。君は僕の妻だ。忘れたことは一度もないし、誰が大事かと聞かれたら、一番は君だ。ただ僕はちよつと、仕事に没頭するくせがある。洋子さんのことを話しすぎたとすれば、仕事で頭から離れなかつたから。これからは、そんなことがないようにしたい。もう一つの原因は、君に洋子さんのような女優になつてもらいたいという僕の思い込みがあつたから。これは、間違いだつたと思つてる。君と洋子さんは別人だ。同じように考えるのは、金輪際やめる。それを分かってくれたら、今度は洋子さんへの思いについて話すよ。いいかい？

マリ子、うなづく。富田は今度は洋子に向かって。

富田 洋子さん……。彼女の言う通り、私が、あなたに惚れていたことは、本当です。

（びっくり）えっ!!

洋子 最初から、あなたに惚れていたんです。でも、あなたは私に見向きもせず、次々、新しい恋人に夢中になつた……。人知れず、泣いた夜もありました。

（さらにびっくり）富田くん……。

洋子 僕が苦勞して取つてきた仕事より、あなたはいつも恋人の方を取りましたから。

洋子 考えもしなかつた……ごめんね!

マリ子 私はすぐ分かりました。私も……。最初は仕事がほしかったから、彼を頼りにしたんです。（泣く）でも今は……。愛してるから。（泣く）

富田 結婚したつていうのに、気持ちをしっかりと整理しなかつた私のせいなん

マリ子
富田

です。でも、ここではつきりさせます。私がこれから人生を捧げるのは、マリ子さんです。夫としても、マネージャーとしても。
(慌てて) いいえ・・・洋子さんのマネージャーでいいの。
(強く) いや！ここはきっぱり、決めた方がいいと思います。あなたに本心を打ち明けた今が、私の引き際です・・・。今まで本当に・・・ありがとうございました。

深々と頭を下げる富田。打ちのめされる洋子。

洋子

まいった・・・。気づかないうちに失恋してた。一日で二人の男に去られるのは、私も初めて。

富田

申し訳ありません。

洋子

あなたも行っちゃうのね・・・戻って来ないのよね。

富田

あんなことを言った以上、マネージャーは・・・。

洋子

分かった。マリちゃんに尽くしてあげて。いい女優になるわ。あなたがマネージャーだもの。

マリ子

洋子さん・・・(号泣)すみません・・・！

富田、マリ子を抱く。

洋子

いいのよ。彼を信頼しなさい。私と別れた男は出世するのよ。

富田はマリ子を抱くように玄関から退場。洋子は一人残される。悄然として玄関を見つめ、それからソファに座るが、恋人を思い出すようにテントを見つめ、立ち上がってテントの中にはいり、そこで横になる。

照明変化して、時間経過(約一時間／舞台上では約10秒)。玄関のドアが開き、妙子と、続いてりえが大慌てで駆け込んでくる。

妙子

洋子さん！大変よ！彼が事故よ！

洋子

誰？

妙子

あんたの恋人！探検家の亀岡さん！

洋子

事故!? どうしたの!?

妙子

滑り落ちちゃったの!今ニュースでやってる!

洋子

滑り落ちた!?どこで!?山で!?

妙子

いえ、空港のタラップで。空港のタラップから滑り落ちちゃったの!

足を骨折したわ!

洋子

うそ!

妙子

テレビ見てたらそう言ってた!

りえはリモコンを取ってテレビの電源をつける。浅井エリ子が映る。

浅井（テレビ）

浅井エリ子です。探検家の亀岡鶴夫さんが事故です。出発直前、成田空港のタラップから滑り落ち、右足を骨折。救急車で病院へ向かいましたが、途中でクルマから脱走して現在行方不明です。世界的な探検は空港のタラップで挫折し、あとには莫大な借金が残ったもようです。

洋子は氣を失って倒れる。

妙子

洋子さん！

暗転―音楽

第三場

ひと月後。夕方5時頃。外は雪。舞台（リビング）は家具がなくなり、がらんとしている。洋子とりえが慥然とした表情で、たったひとつ残されたこたつにはいつている。寒いので親子で綿入り半纏などを着ている。

りえ

（観客に）亀岡さんは、今も行方不明です。

キッチンから妙子が風呂敷包みを持って登場。

妙子

・・・それじゃ、お世話になりました。

洋子とりえはそっぽを向いたままお辞儀する。

妙子

（玄関の方へ）本当にクビなの？

洋子

仕方ないでしょ。お給料払えないのよ。

妙子

・・・これ、届いてました。

妙子はいくつかの封筒（郵便物）をこたつに置いて行く。

妙子

・・・じゃあ行くわ。・・・宝くじ、買ったんだけどね。

二人は妙子を振り向く。

妙子

はずれちゃった。

二人はそっぽを向く。妙子は玄関から退場。洋子とりえが残る。

洋子は妙子が置いて行った封筒を元気なくハサミで開封。

りえ

ママ。お金がないの？

洋子

そう。みんな使っちゃった。

りえ

探検に？

りえ

(元気なくうなづく)

りえ

そーかあ……。亀山さん、どこ行っちゃったんだろう？ ひとりで、

方舟さがしに行ったのかなあ？

家の電話のベルが鳴る。洋子が出る。

洋子

(電話に) もしもし。・・・はい。そうです。・・・ええ。(声をひそめて) 分かりました。・・・はい。・・・はい。分かりましたから・・・あ！

電話切れる。

りえ

・・・誰？

洋子

大家さん。

りえ

お金貸してくれるって？

洋子

なんでよ！・・・家賃払えないなら出て行けって。

りえ

・・・いいよ。りえ、ここならニューオータニの方がいいもん。

洋子

なんでここを出てニューオータニで暮らせるのよ。

最初の封筒を開封して見る洋子。りえが覗く。

りえ

・・・なに？ 宝くじ？

洋子

督促状。電気代払ってないから切れるって。

りえ

(心配) いつ？

洋子

(督促状を読み) えー・・・今日。

りえ

今日!?! テレビも!?!

洋子

切れる。

りえ

トイレも？

洋子

切れる。

りえ 真っ暗!?

洋子 そう。

りえ エアコンも!?

洋子 切れる!

りえ みんな切れるの!?

洋子 そう! 切れる時は別々には切れないの。なんでも一緒に切れるの!

りえ 外は雪降ってんの! 氷点下3度よ!

洋子 モスクワじゃあたたかい方よ。

りえ の部屋の熱帯魚は? あれは22度以上じゃないと生きられないのよ!

洋子 今はコートでも着て我慢して頂くしか……。

りえ ダメダメダメ! 熱帯魚が死んじゃう!(頭を掻きむしって嘆く)ああ!

りえ ママの恋人のせいでこうなった! 私は恋もしてないのに!

洋子 すりゃよかつたのに。

りえ 恋人も妙子おばさんも富田さんもマリ子さんもみーんないなくなった!

洋子 (叫ぶ) もう誰もいなくなった! わー!!

洋子 ちよつとギャーギャーわめかないで静かにしなさい! 頭の神経切れるわ!

部屋の照明が消えて暗くなる。

りえ 切れた。

洋子 ううう、寒い。(二人はこたつにもぐり込む)

りえ ……こたつも切れた。(ママを睨み) どうすんの。5分で北極になるわよ。……熱帯魚! 熱帯魚が凍えちゃう!

りえは子供部屋に駆け込む。洋子は開封した2通目の督促状を手に電話をかける。

洋子 (電話に) もしもし。ガス会社さんですか。私、督促状が届いた花岡と

いうもんなんです。……ガスを止めるって書いてあるんですが、ガスを止められたらガス自殺も出来なくなるんですが……ええ。それをさせないために止める? ……はあー。なるほど。どうもすみません。

(電話を置く) 頭いいわね。

りえ (子供部屋から飛び出して来て) 見て! 熱帯魚が寒くて身を寄せ合っ

洋子 てる! 熱帯魚のことは熱帯魚さんたちでなんとか考えていただきなさい! 今

りえ は私たちが路頭に迷うところなんだから!

洋子 ロトウにマヨウって何? 習ってない。

りえ つまり、お金に困ってにっちもさっちも行かなくなるってことよ。

りえ につちもさつちもって何？
洋子 につちもさつちもって言うのはねえ・・・アレ？ なんでにつちもさつちもって言うの？ 今こんな時に国語の勉強しなくてもいいでしょ！
りえ いつもは勉強しろっていうくせに！
洋子 勉強はしなさい！ その方がいい人生送れるから。
りえ じゃあこうなったのはママが勉強しなかったから？
洋子 (カチンとくる) 勉強は人生と関係ないの！
りえ (混乱) えーっ!!
洋子 破産するエリートだっているし財産築く叩き上げだっているの！
りえ じゃあ勉強した方がいいの、しない方がいいの!?
洋子 勉強しなさい！
りえ 意味分かんない！

「ピンポン！」とドアベルの音。洋子が玄関に行き、ドアを開ける。
浅井エリ子とテレビ局スタッフが登場する。照明でまぶしくなる。
りえは驚いてこたつにかくれる。

浅井 こんばんは。浅井エリ子です。破産したお気持ちはいかがでしょうか？
洋子 なんなの、あんたたち!?
浅井 今のおツライ心境を一言でお願いします。
洋子 このカメラは何!? 写してんの!?
浅井 はい、本番です！
洋子 (カメラを見て嫣然と) あ、どうも。(浅井に) 帰ってちようだい！
浅井 こんな姿を撮らないで！ (スタッフを押し戻す)
洋子 一言だけお願いします！ 行方不明の恋人を待ち続けますか!?
浅井 (押しながら) また生きて会いたいと思っております！
洋子 お気持ち、分かりました！ いったんスタジオにお返しします！
洋子 どういう番組なの!?

洋子は浅井とテレビ局スタッフを押し戻し、ドアを閉めて泣く。
電話のベルが鳴る。

洋子 (テレビ局に)・・・こんな取材をするなんて・・・人の不幸をネタにするなんて・・・(電話に)・・・はい。今出るわよ・・・(テレビ局に)どいつもこいつも、地獄に落ちて死んじまえ。(電話に出る) もしもし地獄ですが・・・。いえ、花岡です。文春の取材？ やめてー!!

ガチャンと音をたてて激しく電話を切る。直後に悲鳴。

洋子 あーっ!! (手をおさえて)

りえ なに？

洋子 受話器で指はさんだ。四本ともはさんじゃった。(おそろおそろ指を開いて) あああ・・・!

りえ どうしたの？

洋子 爪が割れちゃった。ネイルサロンで週一回きれいにしてもらう私の爪が、みんなずたずたに割れちゃった・・・(泣く)。

「ピンポン！」と玄関のベルが鳴る。

洋子 ……もう出ないわ。あんた出て。私はもういないって。(つぶやく) 窓から飛び降りるわ・・・窓から飛び降りてやる。

洋子は下手サッシ窓を開けるが、激しい吹雪が【SE】と共に洋子に吹きつける。洋子は吹雪に押されるが、必死で窓を閉める。りえは玄関のドアを開ける。

洋子 飛び降りることも出来ない・・・ううう、風邪ひいちゃうわ。

宅配業者 宅配便です。

りえ (宅配便を受け取って) はい。ママ、なんか届いた。

洋子 (宅配業者に) あら、どうもすみません。なんだろう？

りえ 外国から。マモル・カサジマ。笠島さんよ!

洋子 誰？

りえ ママの恋人だった、週刊誌記者の笠島さん!

洋子 ああ! 愛人つくって逃げちゃった! なんだろう?

りえ ブラジルから!

洋子 ブラジル!?

りえ あれ? なんだこれ? ……果物?

宅配の袋から出て来たのは、大きなパイヤ二つ。

りえ 手紙がはいってた! (ママに渡す)

洋子 ああ! 笠島さん! (手紙を読む) 「洋子さん。お元気ですか? 僕は今、ブラジルにいます。」へえー! 「週刊誌の取材でサッカーブラジル代表のスター選手を取材したら、その人の宣伝担当にならないかと誘われまして、びっくりするほど高給だったので、今はその人と一緒に世界を回っています。」あらー! 「今日はマカオでカジノに行きたいと思えます。」(泣く) ほらね・・・私と別れた男は出世するのよ! 「パイヤ畑を買い、収穫出来たので、洋子さんとりえちゃんに贈ります。ブラジルの言葉で『マモン・ママオン』と言います。意味は、『巨乳』です。」相変わらず好きなんだから! 「それではお元気で!」(泣く) パイヤ

りえ
洋子
りえ
りえ

もらった……。(胸にかざす) 巨乳二つ。
でも、おなかいっぱいになりそう。
(せつない) 今夜の夕ご飯で食べようか。(果物を置いて泣く)
……。そうだ！ いいこと思いついた！
(期待して) なに？
熱帯魚の水槽にポットのお湯を入れてみる！

洋子はがつくり。りえはポットを取りにキッチンへ駆け込む。洋子は自殺を考えてふらつくように寝室にはいり、ドアを閉める。すぐ
にりえがキッチンから登場。ポットを大事そうに抱えて子供部屋の
ドアを開け、中にはいる。洋子が寝室のドアを開け、首を吊るため
のひもと南京椅子を持つて登場。ひもを下手キッチン近くの梁にか
け、ひもの丸くしたところを自分の首にかけ、思い切つて椅子から
飛び降りるが、ひもが長すぎたために普通に床に着地する。直後に
りえが子供部屋からポットを持つて飛び出して来て号泣する。

りえ

あああ!! お湯が熱すぎて熱帯魚が浮かんじゃった!! 私が殺しちゃっ
た!! 27匹も! ああ!

りえはポットをこたつに置き、そのまま突つ伏して号泣する。洋子
はひもを下手バーに片付けて、りえのそばへ。

洋子

(りえの身体に手) りえちゃん……。

りえ

(泣きながら) 私が殺しちゃったの。青いピーちゃんも、きれいな縞の
テトちゃんも、私が殺しちゃった……。みんなみんな。

洋子

(つぶやくように) ママが悪いのよ……。あきれたでしょう……。自分
でもあきれた……。みんなママのせいなの。

りえ

洋子はしばらくりえを見ていたが、決意したような顔でポットを持
つて立ち上がり、キッチンへはいって行く。
(泣きながら) 顔の赤いラミちゃんも……。殺しちゃった。仲のいい夫
婦のグーちゃんとミミちゃんも、二人で浮いて死んじゃった……。

洋子はココアを入れたカップを二つ持つて出てくる。

洋子

(幽霊のような声で) りえ……。ココアよ……。あつたまるわ。

親子はこたつでココアを飲む。

りえ ママ。・・・寒い。

洋子 (りえに寄り添い、あたためる) ママがあつたためてあげる。

りえ 探検家の恋人は、遭難しちゃったのかな・・・？

洋子 私たちも、遭難しちゃった。四谷のマンションでも遭難するんだ。(涙声) おかしいわね。

りえ 熱帯魚のお墓つくんなきゃ・・・一人ずつくらなきゃ。ピーちゃん、

テトちゃん、ラミちゃん、グーちゃん、ミミちゃん・・・。(フェイド

・アウト)

洋子 眠りなさい・・・ママが抱いててあげるから・・・抱いててあげる。

あなたと一緒によ・・・ずっと一緒にだから・・・。

洋子、ココアを飲み干し、あたかも心中するような感じで娘をさすり、泣き、カップをこたつの上に倒し、最後は娘を抱いたまま眠りに落ちる。二人はこたつの上で動かなくなる。ピンスポットが消え、舞台上はシルエット明かり程度に暗くなる。【SE】吹雪の風邪の音が小さく始まり、徐々に大きくなる。

間。「ガタン！」と大きな音をたてて下手のサッシ窓が開き、猛烈な吹雪が部屋の中に舞い込む。【SE】「ヒューッ！」という激しい吹雪の音。部屋の中は、さながら吹雪の雪山のようになる。サッシの外から懐中電灯の光が部屋の中に差し込み、壁をさまよう。仰々しい探検番組の音楽がスタートし、ベランダから防寒具姿の亀岡が二人を救いにやってくる。

亀岡 (片手を口につけ大声で呼ぶ) 洋子さーん！ りえちゃん！

亀岡は力を込めてサッシ窓を閉める。SEが止み、吹雪がなくなる。

亀岡 ああ！

こたつで動かなくなっている二人を発見。近づき揺り動かす。

亀岡 洋子さん！ りえちゃん！ 僕だよ！ 帰って来たんだ！ 帰ったんだよ！

洋子 (目覚めて) ああ！ カメちゃん！・・・やった！ りえ、天国に着いたわよ。

亀岡 え？ 違うよ！ 生きてるんだ！

りえ (目覚めて) あ、カメさんだ！

亀岡 そうだ。帰って来たんだよ！

洋子 もう少し早く帰ってくれたら死なずにすんだのに。

亀岡 死んでないんだよ！
洋子 死んだのよ。(泣き声) さっき、ココアに葉入れて。
亀岡 きつとセサミンだ。
洋子 そうかしら？

亀岡 (土下座) すまなかつた!! 空港の階段で足を骨折して、恥ずかしすぎて、出て来られなかつたんだ！ 実家の納屋にかくれてました！ でも、もう大丈夫！ テレビ局が僕を面白がってくれてねえ、インチキ探検隊シリーズをつくって放送したいって！ さっそく来週、謎の雪男を追って、雪男の着ぐるみと一緒に南米へ行くよ！

洋子 よかつたわねえ！
亀岡 遅くなつて悪かつた！ 借金は必ず返します！
洋子 いいのよ！ いいの！ 帰ってくただけでいいの！ 今まで出て行った恋人は誰も戻らなかつた。でも！ これで前例がくずれた！ 過去を吹っ切れた！ ありがとう！ 帰って来てくれて！

洋子、亀岡と抱き合う。

亀岡 (離れて) 僕だけじゃないんだ。実は、連絡を取り合ったら、君のため是非とも駆けつけたいと言ってくれた人がいるんだ。
洋子 誰？

部屋の照明が明るくつく(電気が戻った)。玄関のドアから金持ちになつた笠島が登場する。

りえ (明るくなつた) あつ！

洋子 (笠島を発見) あー！ 彼だ！ 彼が帰つて来た！
笠島 お詫びに来たんです！ 二時間で帰つて来なくて、まことに申し訳ございませんでした！ (頭を深く下げる)

洋子 (感激) いいのよ。帰ってくるのに時間はかかったけど、でも帰つてくれたんだから。あの子と暮らしてるの？
笠島 いえ。妊娠は、うそでした。でも別れるのに時間がかかつてしまつて。そうだったの・・・先ほどパイヤとお手紙が届いたわ。チャンスをつかんでリッチになつたつて。よかつたわね！

笠島 実は、マカオで彼から連絡を受けまして。洋子さんが困っていることを知つて日本へ帰ろうかと思つていたら、その晩カジノで三千万円当てまして。これは何かの啓示だと思つて、そのお金を持つて飛んで来たんです。(鞆から小切手を出す) どうか、受け取ってください。

洋子 (受け取り) すごい・・・りえ。恋人が二人も帰つてきたよ。
りえ 部屋があつたかくなつた。(電気が戻つたという理由もある)
笠島 いいえ。二人じゃないんです。

玄関にベストセラー作家になった村上が現れる。

村上さんだ！

ああ！ あなた！

りえは電気が戻ったので子供部屋に熱帯魚を確かめにはいる。

村上

君には本当にすまなかった。でも、僕はあれを書き上げたよ。

洋子

知ってる。ここにいた時は迷路の真ん中にいるみたいだったけど、今や誰もが知るベストセラー作家になったのね！

村上

そう。その日々があつたからやり直せたんだ。君のおかげだよ。

洋子

私も嬉しい。あなたが本当の作家になつてくれて。

村上

僕一人で書いたものじゃない。あの本は、君と二人で書いたものだと思つてる。是非これを受け取つてほしい。

村上はスーツの胸ポケットから封筒を取り出して洋子に渡す。

洋子

なに？

村上

契約書だ。僕の本の印税が、半分君のものになると書いてある。

洋子

(受け取り、涙) こんなことが起こつていいの？

村上

もちろんさ。それから、今夜はもうひとつ、君に聞かせたい話があるんだ。それを彼から話してもらおうよ。

村上は玄関を開けて富田とマリ子を迎え入れる。

洋子

富田くん・・・マリちゃんも！

富田

・・・今日はひとつ、仕事の話を持ってきたんですが、もしよろしければ、私がマネージャーをやらせていただきたいと。

洋子

(涙) いいけど・・・なんの仕事かしら？

富田

村上さんのベストセラー「別れた男は出世する」が映画になるんです。

マリ子

主演はもちろん、花岡洋子さんです。

りえ

(子供部屋から飛び出し) ママ！ 電気が戻ったので、熱帯魚が泳ぎました！ (ママに抱きつき喜ぶ)

洋子

(りえを抱き、富田に) ええ・・・受けると思うわ。

洋子を囲む人々、笑顔で拍手と歓声。エンディングの音楽スタート。

妙子が玄関から駆け込んでくる。

妙子

洋子さん！ 大変よ！ あんたの別れた恋人たちが表に全員集合してん

洋子

の！ 行列つくってるわよ！
えーっ！

浅井エリ子とテレビ局スタッフが登場する。部屋は大騒ぎ。

浅井

こんばんは。浅井エリ子です。女優の花岡洋子さんの自宅から中継でお送りしています。彼女は無事、破産から救われた模様です。彼女のおかげで出世した男たちが、全員戻って来て彼女を救ったのです。「別れた男は出世する」ベストセラーとなった本のラストシーンとまったく一緒です。(部屋がうるさい) スタジオさん、聞こえますか？ 本のラストシーンとまったく一緒です！

音楽高鳴り、舞台上大喜びのうちに緞帳ダウン。

幕